万象　平成十四年十一月十三日第三種郵便物認可
平成三十年八月一日発行（毎月一回一日発行）
第十七巻　第五号（通巻一九七号）

万象

BANSYO

八月号

2018. 8

八月の句

なほ北に行く汽車とまり夏の月

中村汀女

涼し気にも時には暑苦しくも見える夏の月です。汽車がとまり、ぽっかりと浮かんだ月を眺め、これから向う北への期待や不安が交錯するしばしの時が感じられます。

夫の転勤により仙台へ向う時でしょうか。一抹の寂しさも感じられますが、月明りによって払拭されていくようにも感じられます。

最後に夏の月でしめたところに艶やかな色気が感じられます。汽車の小さな窓から眺める壮大な空の月に作者の思いが照らされています。

（宮﨑知恵美）

万象

BANSYO

平成三十年
八月号

ヒロシマのデルタに
青葉したたれ
「永遠のみどり」　原　民喜

万　象

平成30年8月号

主宰作品　短　夜　……　内海　良太　4
副主宰作品　薫　風　……　小林　愛子　5

風音集

……　飛高隆夫・江見悦子・柳澤宗正・原田しずえ・山田春生・福島せいぎ・内藤恵子　6

続・万象と共に⑳　角川源義と沢木欣一　……　内海　良太　8

同人作品

内海良太選　……　9

同人作品の佳句　……　内海　良太　33
第十六回「万象」新人賞発表　……　34
新人賞受賞作品　……　編集部抄出　36
新人賞の選考経過　……　江見　悦子　38
選考の感想　……　40

同人特別作品

小千谷縮の里　……　山本　絢子　42
初　夏　……　荻野加壽子　43

内海良太句集『青嶺』自選句鑑賞⑰
段ボールの底が抜けさう瓜の苗　……　山下　良江　44
かぶと虫鎧は井伊の赤備　……　奥　太雅　44

小林愛子句集『辻楽師』自選句鑑賞⑰
散髪のあとは選句や初炬燵　……　谷田部　栄　45
カフェ床屋パン屋蕎売り迷宮路　……　久留島規子　45

万象ホームページ　http://www.bansyo.com

特別作品評（六月号）……水野　加代　47
同人作品評（六月号）……広瀬　俊雄　48
万象招待席　台湾の旅……村上　和義　50
　　父の忌に……喜多尾明子　51
万象ノオト「帽子」……須賀允子、澤照枝、柳澤道子、奥野周光、岡田あゆみ、立原千代子　52
私の一冊　樋口桂子著『日本人とリズム感』……大村　峰子　54
郷土の俳人⑯　続「沼の詩人」石井とし夫　千葉……内海　保子　55
俳書探訪……古川　京子　56
蕪村処々⑰　公達に狐化たり宵の春　蕪村（『夜半叟句集』）……福田　雅子　57
巻頭作家（七月号）プロフィール　上岡桂子（栃木）……増田　幸子　58

万象作品

飛高隆夫選……59

万象基金のご報告……75
万象作品の佳句……飛高　隆夫　76
選者のはなし㉒……三屋　英俊　78
第十四回「万象」千葉県支部俳句大会……三屋　英俊　79
新緑の台湾の旅……村上　和義　80
同人会便り　第一回幹事会開催……柳澤　宗正　81
珈琲タイム⑲……81
「万象」中央句会報（五月）「万象」同人句会報（五月）……82
東西南北……84

〈表紙イラスト〉永井もりいち　〈カット〉片桐帆一

短夜

内海良太（主宰）

成田山新勝寺吟行　二句

耳元に蚊の鳴きにくる奥の院

将門を鎮めし厨子のご開帳

村ぢゆうが水の匂ひの田植どき

おけさ節佐渡も田植の終るころ

石楠花や朝の湿りに珠ひらく

大坪景章先生へ　二句

弔辞書き終へ短夜の仕舞風呂

人の喪に気落七日や立葵

薫風

小林愛子（副主宰）

桐咲けりねばり失せたる街の空

ガーベラやワインに浮かぶコルク片

干梅を盗み食ひたる顔なるぞ

蜂の巣を落せし動悸持ち歩く

獄窓記読むや壁這ふ夜の蟻

川のぼる潮の香卯の花腐しかな

悼・大坪景章氏

薫風に鼻梁を高く逝かれけり

風音集

水中花　飛高隆夫（万象作品選者）

雉鳩のでででつぽうぽう春惜しむ
今年竹見てゐる胸に風通る
手づくりの藜の杖のやや短か
母の日の過ぎたるカーネーション畑かな
河の色深くなりたる薄暑かな
水中花今年は早く咲きにけり

山法師　江見悦子（組織人）

金蘭のひともと柞林かな
むくの二羽雀隠れを後先に
百輌の貨車ゆく荒野ユッカ咲く
千仞の谷へ大滝ふくらめり
ヨセミテの渓をましろに花水木
逝きたまふ白盛り上ぐる山法師（大坪景章先生を悼む）

薄暑光　柳澤宗正（同人会会長）

蓬干し蓬茶飲みに来よと言ふ
鰡の子の渦巻く浅瀬日を返す
桟橋に白き客船薄暑光
一斉に雀飛び立つ菜種畑
山門の屋根に鳴き合ふ雀の子
岸壁に砕け散る浪岩つばめ

春の駒　原田しずえ（顧問）

夕闇に迫ってゐたり御所桜
うぐひすや忌明けの縁を拭きをるに
首振つて人をうべなふ春の駒
馬のゐぬ厩暮春の風さやか
行く春を追ひかけゐるや白てふてふ
垣越しに竹裂く音やみどりの日

夏燕　山田春生（顧問）

府中祭
満天に星のまたたき神輿渡御
高麗晴れてなんじやもんじやの花盛り
風薫る秩父の凡夫兜太やあーい
寝たきりの妻にまづ注ぐ新茶かな
新緑や地にならべ売る福の神
月山の空へ舞ひゆく夏燕

明易し　福島せいぎ（顧問）

花まつり母無き稚児の手を引けり
地に触れてぼうたん開く二三輪
四月馬鹿旅に舌焼くもんじや焼
花みかん匂ふ護摩堂開け放す
明易し雀が騒ぐ枕元
公園に太鼓の稽古五月来る

若葉雨　内藤恵子（顧問）

大坪名誉主宰逝去　二句
師を送り降りはじめたり若葉雨
ほほゑみを残して逝けり夏はじめ
池つなぐ流れに亀の子がゐたり
杉山の底をつなげり著莪の花
どの道も若葉若葉の成田山
コンドルの煉瓦の館走り梅雨

続・万象と共に ⑳

角川源義と沢木欣一

内海良太

能登半島の北端、曽々木海岸に三人の句碑が並んで立っている。

冬濤に百日の唄あますなし　角川源義

濤寒しうたひておらは雇人だ　大野林火

砂取節うたへば応ふ磯鵜　沢木欣一

昭和46年11月、俳人協会の金沢吟行会があり、富山を同郷とする角川源義と沢木欣一は会の後、能登を千田一路氏（現「風港」主宰）の案内で周遊した。源義と欣一の句はこの時のもので、林火の句は二年前に同所を訪れた時のもの。地元の保存会が三基を同時に建て、トリオ句碑と呼んでいる。

今年は角川源義生誕100年（大正6・1917）にあたり、関連する記事や特集を目にすることが多い。「万象」の同人句会は新宿百人町の俳句文学館で開かれる。ホールの壁の「俳句文学館建設基金御寄付芳名」というプレートを見る度に、建設委員長だった源義氏のご尽力とご苦労に思いを馳せる。いつも感謝しながら利用させていただいている。

沢木欣一の「塩田」の一連の作品には源義、林火のゆかりを強く感じる。昭和27、28年頃は源義にとっては書店や総合誌「俳句」の経営。ご両親や折口信夫、堀辰雄の死など、精神的にも肉体的にも疲労と多忙の極みに達していた。

源義は「俳句」の編輯を大野林火に一年だけでもと説得した。林火は編輯長を引き受け、早速「『俳句と社会性』の吟味」と題して　沢木欣一、能村登四郎、原子公平、田川飛旅子等を登用したのである。欣一の「塩田」の一連の作品は源義―林火―欣一のこのような思いがけない経緯によるものだった。

昭和56年春、角川源義夫人の照子さんは、曽々木に亡き夫の句碑と対面した。

春の濤酌み欣一と対の句碑　照子

さいはての句碑に掛け置く春ショール　照子

「春ショール」の句、作者の心情と景が一体となりいつまでも忘れられない。

同人作品

内海良太選

○は佳句に選ばれました。

札幌　松原智津子

屋根裏の軋み無明の余寒かな
水音を確かむるかに水芭蕉
エカテリーナの馬車道橡の花盛り
リラ冷や瀕死の白鳥見し夜道
○ネヴァ川の遠き跳ね橋白夜めく
青天を洗へり金の大噴水

札幌　岡本敬子

春がすみ入江をつつむ厚田村
反り返る漁師のみがきにしんかな
みじろぎもせぬ鷺(のすり)ゐる鷺巣組み
頽(くづほ)るる朽木に根付く柾の芽
リラの雨寒しともがら病みをれば

札幌　濵谷和代

高層のビルより低し朧月
湖にえぞ春蟬のひとしきり
鍵盤の音の重たき花曇り
漁火の瞬き遠し明易し
風薫る駿馬の駈くる朝の丘

札幌　大内和憲

銀蝿の払はれてまた払はれて
擦傷を癒すまじなひクローバー
リラ冷えや窯出しの壺ぢりと鳴く
初蝶の風より軽く生まれけり
万緑を裂きて一閃ダム放水

札幌　紅露恵子

草むらの揺れ初蝶の息遣ひ
天空へ伸びゆく末に囀れり
触れさうで触れぬ水面へ柳の芽
うつむきし紫と白延齢草
湖の青極まりぬ夕薄暑

札幌　玉田瑞穂

○蛇の衣吾に未完の詩残る（大坪貞章師を悼みて）
葉桜の綺羅映りゐる忘れ潮
鵜の翔ちて一湾残る油凪
木霊して杣深く入る青嶺かな
初夏の雲伸びきつて砂嘴の鼻

札幌　大内マキ子

風荒き日々にやつれし海猫抱卵
みどり児のまあるいあくび風薫る
水芭蕉は子を抱く母に似てゐたり
まなじりに光を曳きて沙羅落花
馬の親子に鼻すりよせて夏野かな

江別　佐藤哲

牧場の開き切つたる北こぶし
煉瓦組む隣の家のチューリップ
色うすき千島ざくらの咲き競ふ
老いふたり逢引きするや春北風
間引きする畑の青菜に慈雨の来し

苫小牧　林陽子

倒れ木にあまた実生の楙二葉
とうすみの潜みし楙のをさな木に
火の山の風をまともにつばくらめ
リラ冷えやリラのかをりの濃き淡き
万緑の空限り無く楙大樹

苫小牧　落合裕子

桜散る一片ごとに光帯び
強東風やロシアの煙霧押し寄する
切株に栗鼠の太き尾柳絮飛ぶ

八重桜ベッドの母に一房を
つややかに楓若葉のほぐれ初む

苫小牧　榎　美幸

楢古木根より遠くにひこばえて
母ひとり三坪ほどの畑を打つ
チューリップ苔の先に花の色
赤白黄の園児の帽子チューリップ
ご神木の幹の割れ目にすずめ蜂

湯沢　小松　敏郎

洗ひたる野蒜真珠の光放つ
○路傍仏眉よりしづる春の雪
紫雲英田に田の神祭る旗の立つ
蕨摘む退職教師籠下げて
神の餅朴葉に供へ端午かな

上山　森　和子

鶯降りて植田の水を乱さざり
雨来るか畑をかすめて燕来る
青桐や子の居ぬ村の遊園地
身構ふる馬穴の底の蝮の子
ぽつかりと鯉の呑み込む新樹光

新潟　佐藤　三男

表札は藁一本の雀の巣
リハビリの疲れ杖より抜けて夏
免許返納足が淋しき立夏かな
椿落つ音の静けさ五合庵
一人居のさびしさに聞く河鹿笛

新潟　佐藤　雄二

蓑塚に蟇畏まる雨上り
風鈴や歩が大事なる将棋の子
萬代橋に虚子の一句や夏燕
あと二日曾孫が来るよチューリップ
合掌をしばし解かざり青葉寺

新潟　髙橋　ひろ

夏雲に大きお声も温顔も
捉へられぬ五月の風の遊び蔓
神輿庫半分開けて出御待つ
白布を巻きて神輿の黒漆
でで虫やずんぐり育つ青梗菜

新潟　川村　みよき

お極りの昔の話ぜんまい揉む

乳母車低く枝はる柿若葉
克雪の二階玄関つばめ来る
雨上り少女のやうに山笑ふ
麦秋を分けて山風まつしぐら

南魚沼　森山暁湖

街路樹の芽吹くや風のかろやかに
屋根替の足場きりりと組まれたり
満開の藤の滝なす出城跡
首立ててくちなは渡る鯉の池
手造りの湯呑みに新茶持て成さる
○耳鳴りとまがふ春蟬戊辰墓所

宇都宮　阿久津勝利

マニキュアの十指の掬ふ山清水
川沿ひを貨車長々と花は葉に
男体山を拝し田植のはじまりぬ
歌碑前の足湯に浸る晶子の忌
若葉冷出土の甕の裂け目より

芳賀　大村かし子

鉄塔の脚ゆらゆらと大代田
ぼうたんの五十個咲かす力かな
急降下餌一呑みの親鴉
長屋門前にはためく武者幟
○母の日や水のいらない花と種

栃木　見目トキ子

杭一本植田を決める水加減
植田出て堰に出合の余り水
塗りたての畔の泥とる燕かな
農継ぐ子継がぬ子も来て田植かな
新緑の樹々それぞれの光放つ

佐野　亀田やす子

夏立つや伝法院の池めぐる
大蛇のカーキ色なり濠泳ぐ
草むらの揺れ鳩の巣のありやなし
大降りの山路明るき桷の花
南吹くユーカリの葉のしらじらと

佐野　増田幸子

夏近し水引を結ふ権禰宜
雨を来て謙信平ただ緑
六角堂の甍をすべる余花の雨
弁財天の暗き窟より初蚊かな

花桐や化粧箪笥を久に開け　佐野　駒形祐右子

花よりも良く売れてゐる野菜苗
池めぐる緋鯉真鯉を従へて
岩かげに岩の色して恋の蟇
撫山の清水にのんど潤せり
D51ぞ汽笛の吠ゆる麦の秋（両毛線の小山足利間にSL走る）　佐野　加藤季代

麦秋の香の日向にも日蔭にも
早苗田の水面の風のあさみどり
城の威は石垣にあり松の芯
杖音に寄り来る鯉や青葉光
ご朱印の乾くを待てり著莪の花　佐野　鍋島広子

店先に仕掛の絵本子供の日
大谷石の切り出し跡の地下涼し
切り岸に黄花の藤やダムの風
磨崖仏に浸食の跡蔦茂る
SLの汽笛の間延び麦の秋　佐野　阿部澄

天道虫翅を広げて寝返りぬ
足音に首をもたぐる蛇小さし
雨に薙ぐ立浪草や有三碑
随身門につづく山坂夏の霧
足尾路や揺れて短き藤の花　佐野　芝宮留美子

真夜すぎて春満月の雲払ふ
夜の明くる峡囀のいつせいに
伝法院の池に子雀水浴びぬ
鷺降るる伝法院の青葉かな
謙信平見下ろす代田ひかりけり　足利　大木茂

ひと刷毛の琥珀の垂れや穴子鮨
卯月波智恵子の詩碑の肌理細か
鳥交む室の八嶋の島巡り
香水に噎すや仲見世裏通り
水槽の鮑の泳ぐ刻待てり　さいたま　手島南天

遊水池に暁つぐる雲雀かな

猫の恋東宮御所の垣の内
遠足は無蓋車なりぬ昭和の日
五月晴（俳句師に）富士の胸乳に一つ雲
シャガール展でるや高きへ黒揚羽

山　本　右　近（さいたま）

山影の山負うてゐる若葉冷
風薫る薬師如来に泥鰌髭
○言霊を闇に吐き継ぐ薪能
噴煙とまがふ横雲麦の秋
遠蛙坊の木立に夜の雨気

中　村　千　久（志木）

聖五月チョコの包みのキリル文字
○影飛んで光となりぬ夏つばめ
雨上がりきらめく街や若葉冷
たも網の網目のしづく夏来る
一面のかはづの闇となりにけり

三　好　か　ほ　る（所沢）

武甲嶺を縦横にして夏燕
巣燕の出入り自在の山の駅
草の王手折れば汁をしたたらせ
青山椒摘むや川風あびながら
○ヘップバーン展観て夕暮の若葉雨
にはとこの花小流れの音迅し
○えびね蘭鉢に咲かせて軒低き
遠つ祖の墓うぐひすの声しきり
蜃気楼海の底ひに都あり
水かげろふ桂若葉の幹のぼる

水　野　加　代（所沢）

青葦の伸び放題に風わたる
囀を包みこみたり楠大樹
石垣の天をめざして蔦若葉
春疾風庚申さんの眉の反り
しだるるに任せ揺れつぐ夕桜

森　岡　恵　子（所沢）

河鹿鳴く上市の灯は早ともり
万物の一つと消ゆる朴の花（大坪俳句名俳主宰逝く）
○それぞれに来し方をいふ修験宿
何も釣れぬ時々青葉梟の鳴く
大山蓮華雨中天与の香を放つ

山　口　素　基（入間）

千葉　田中道江

御開帳へ電車急げる植田なか
赤松の幹の赫きに夏兆す
木洩れ日や滝音ふいに変りたる
夏蝶や鷹女の墓へ風にのり
声明や散華とまがふ揚羽蝶

酒々井　竹澤竹里

菖蒲咲く小流れに干す甲羅かな
高く翔べ遠く飛べよと楓の実
○楓の実種が錘や竹とんぼ
酒蔵を囲む掘割り花あやめ
しよつぱなの子育て終へし夏燕

佐倉　内海保子

石楠花や笑ひ声洩る巫女溜り
仲見世の空ほそ長く薄暑かな
大塔の裾を明るく山法師
身を反らし大塔見上ぐ薄暑かな
師の逝く（悼大坪貞子師）や泰山木の花高く

佐倉　大内佐奈枝

切られ与三縞のいなせや傘雨の忌
玉レタス巻ききらずして五六枚
浦島草下草に糸絡ませて
丸く刈る柘植に蜥蜴の乗りてをり
若楓三重吉ここに教師たり

佐倉　三屋英俊

万緑や炯眼くわつと青不動
噴水の剣天刺す青不動
玉の汗飛ばし連打の護摩太鼓
座に戻りほつと汗拭く太鼓僧
大護摩の済んで薫風堂渡る

四街道　奥太雅

春疾風網戸勝手に走り出す
蛇穴を出て畦道に棒となる
○矢の形の足跡泥に燕翔つ
しらじらと孃歌の峰の遅桜
巣燕や石を重しに新聞紙
巣燕の頭一つや玄関灯

船橋　大坪貞子

こでまりのまばゆく介護ホーム道
決断のホームは八十八夜かな

三人の（外泊の帰り）最後の旅となる立夏
梅天のをつとは二転三転なり
お遍路（母を送く）の風格でいい旅立ちぬ

船橋　山下良江

小羊の背の刈り跡山笑ふ
沼の辺の宗吾の里は田植どき
風薫る五色の総門くぐりけり
眼閉づ鰻の目打ち下ろすとき
九十九里茅花流しの白き土手

船橋　大山春江

海桐咲く海への道の白々と
花うばらほのかに渡る潮の香
一徹な男好みし豆御飯
風光る萌黄のうねる九十九谷
裏本尊覗けばかすか徹の風

船橋　赤堀洋子

夫を越え喜寿となりたり朧の夜
竹落葉上げてあたらし土竜塚
青葉雨落慶の塔ぬらしけり
藤咲いて馬場は蹄の跡ばかり
竹の子の掘られし跡や水を噴き

船橋　久保村淑子

ごみ虫の髭を引つぱる蟻二匹
○御朱印所墨の香つんと薄暑なる
赤松庵の瓦の照りや山法師
木目ばかり残る額堂風薫る
石斛や般若心経響き来る

船橋　大坪あきら

さくらんぼ好みし父の今は亡き
母と手を成田詣やみどりさす
そよそよと施設を廻る夏の蝶
衣更へて日蓮さまのお膝許
さみだれをゆつくりとゆく野辺送り

船橋　片桐帆一

廃業の花屋の裏に時計草
莢豌豆噛めばひろごる青き味
田の塊の春の水吸ふ音を立て
籠を積む（成田吟行二句）よろづやの軒竹婦人
一粒丸四粒いただく薄暑かな

柏　山本とく江

五月雨や僧の立ち寄る生薬屋
葉桜や厩舎に馬の静もれる
幾重にも白波立てり山法師
落慶の行き交ふ僧衣風薫る
血洗ひの池面に吾と夏景色

柏　松原三枝子

太々し茅花を活くる文学館
肉厚のカツサンド欲る立夏かな
鉢に咲くひとつばたごのやはらかさ
をがたまのバナナの香り散らしけり
青すすき風の湿りを寄せつけず

柏　内田郁代

不忍池をやさしくしたる蓮若葉
惜春の渓を隔つる遥拝所
ばさばさと烏揚羽の横切る音
薄暑光成田に多き生薬屋
万緑の真つただ中の鷹女の墓

柏　古川京子

青鮫の句碑へ牡丹の緋色燃え（金子兜太句碑二句）
春惜しむ襖に兜太自筆の句
新緑の真つ只中や浮御堂
木洩れ日や滝いろいろな音をたて
落慶の檜のかをり緑さす

流山　沢辺たけし

黒門の弾あと覗く花衣
花の昼からくり時計より木遣
夕昏の空の蒼さに春惜しむ
葛飾野若葉の匂ふとのぐもり
新緑の色をたがへて溶け合はず

流山　穂苅照子

本山の滴り集む不動滝
鷹女の墓のコップに蟻の溺れたり
雨上り大きく開く山法師
黒揚羽小さな闇をはこびゆく
太陽にもつとも近き樟若葉

浦安　田中幹也

千枚田一枚づつに夏鴉
開け放つ蜑の家々青葉潮
支へ棒太き海女小屋蔦茂る

大寺の山門小さき梅実る
恩師逝く寂光に満つ若楓

東京　谷田部　栄

着任の丸刈り教師夏来る
麦の秋屑屋に売りし乳母車
○一竿に野良着と産衣聖五月
源流は那須の雪嶺花うぐひ
串鮎の目に溜りたる化粧塩
師の逝くや刈られて香る椿垣（大坪名巷主宰を悼む）

東京　須賀　允子

老鶯の声に包まれ掃部山
麻袋に育つじやがいも路地住ひ
新緑をまとひて奇岩によきによきと（桂林　二句）
蝶一匹雨の漓江を渡りゆく
惜命と刻まるる杖五月憂し（波郎記念館）

東京　降幡　加代子

垣根の際橡の花咲く紅濃かり
切通しの斜面に咲けり諸葛菜
石榴の花咲き初めたり後楽園
黒部川流るる岸に藤の花

○遥かなる白山映る植田かな

東京　名和　政代

赤シャツの囮の鮎を自慢気に
反り橋に大蟻の列雨あがる
万緑の中の吊橋椎匂ふ
竹落葉流るる川に染物屋
本山の回廊の屋根緑さす

東京　山本　絢子

○牛小屋の奥より一閃夏つばめ
訪ぬれば風吹くばかり牡丹寺
鷹女の像背にそよぎぬ若楓
不動尊詣りてよりの鰻飯
引越の荷にまぎれたりトマト苗

東京　藤田　裕子

眠る子の重み腕に暮春かな
青楓赤ん坊高く高く挙げ
百千の燭をかざせり橡の花
蕗の筋引くに心のなごみゆく
筍の芯に残れるぬくみかな

東京　赤松郁代

十津川の名もなき高き山笑ふ
囀や谷瀬吊橋渡りきる
朝雉子の鳴きたる空の眩しかり
桜貝置き去る波の大きかり
二歩退いて波をかはせり春の潮

東京　島野ひさ

目的はシャンシャンだけよ子供の日
老鶯のしきり野毛山掃部山
葉桜をそびらに野毛の汀女句碑
汽笛鳴る丘の館や薔薇の雨
一声の嗄れてゐたる羽抜鶏

東京　佐藤晴子

大佐渡の岩間に萱草群れ咲けり
安宅の関波音静か義経忌
一面の野苺の花土塁跡
木の芽和母に供へし九谷焼
隣の子ドレスをみせに更衣

東京　加賀葉子

遮光布掛け甕の荇菜の黄花かな
薄暑光川底浅き神田川
傷をもつ実梅も供へ六地蔵
漱石の葉書現はる五月かな
土煙上げて騎馬戦裸足かな

東京　久留島規子

掃部山風に匂へる椎の花
との曇る開港の街桐の花
洗ひ場に菖蒲立て掛け仕舞風呂
抱へ来る今朝の筍創深し
若葉風大音声の護摩祈祷

東京　中村弘

一陣の風初蝶を攫ひたり
かい掘の池透きとほり柳絮飛ぶ
狛犬の口の赤きや木の芽冷え
青き踏む肩にピンクの入園証
柔らかく土動きたる穀雨かな

小平　吉村光子

石楠花の咲くは手品を見るやうな
薬効に浮腫ひきたり五月晴
雨弾く紺こそ佳けれ杜若

散りつもるなんぢやもんぢやの花の嵩
香らねば造花の如し紅さうび

立川　疋田華子

口紅を明るき色に喜寿の春
歳三のブロンズすくつと若緑
波郷句碑うら五六本の茗荷竹
紫蘭かな盤水句碑にあふれしむ
手を打ちて鳴き龍鳴かぬ薄暑かな

町田　吉中愛子

まつさらな壁に燕の泥ぽつと
夏立つや肉に塩ふる裏おもて
大神へ胸突八丁えごの花
棺出づ（悼 畏京師）大山蓮華の香の中へ
茅花野へ四条畷を口ずさみ

町田　広瀬俊雄

奈良漬を熟す石蔵春の暮
遅桜磴のけはしきさざえ堂
夏燕小鹿野の町の酒蔵へ
武甲嶺の岩根こごしや桐の花
かげりなき五月の青よ師を悼む

（寄梅）小林珠江

行く雲のうすく尾を引く紅うつぎ
母の夢姉の夢みし春の風邪
不揃ひにハンカチの花はためけり
磨き置く英治のルーペ柿若葉
藤匂ふふた間にかたみ分けの品

横浜　仲山秋岳

朝市に列なす人や夏来る
さくらんぼ一粒食みて昼寝かな
夏帽子被りて先師のお通夜へ
靄はれて現れたるホテル谷若葉
街灯の古りし坂道つばくらめ

横浜　榎本文代

暮れてなほ風音憲法記念の日
○夜も白しなんぢやもんぢやの咲き満ちて
アカシアに海の風くる野辺送り
一本は母の遺影にカーネーション
藍浴衣母の縫目に触れてみる
あぢさゐや喪服吊してそのままに

横浜　浅井敦子

遊女らの通ひし露地や春の闇
松の芯（掃部山）顎しかと引く直弼像
汀女句碑（野毛山）に子のまたがつて端午かな
白き巨船春の夕日を曳きゆけり
花嫁に花婿に揺れ藤の花

横浜　西本才子

菜園の初挽ぎとどき豆の飯
初鶯渚に聞ける白秋碑
高波のひと日吹き晴れ牡丹忌
米屋たりし庭に盛りや花ユッカ
ほととぎす目つむり聞ける楓の丘

横浜　川越昭子

蔵造り多き三崎や竹の秋
棕櫚の花ほぐるる海の日を浴びて
穀雨かな馬穴に雀水浴びす
日脚伸ぶ能楽堂の大時計
砂浜につばめとび交ふ白秋碑

横浜　久松和子

デパートの盥にねむる睦五郎
鋭き声の雉子の走りや富士裾野
蜘蛛ひそむ玄室の鉄扉固く閉づ
火口湖は紺碧に映ゆ夏来り
蚕豆に爪を立つれば彈けとぶ

横浜　寺沢千都子

日本丸のマスト抜けゆく赤風船
青空へピエロ吹き上ぐしやぼん玉
初夏や運河に魚の跳ぬる音
豌豆のすぢ取る峠のバス停に
抽出しの底にはりつき紙風船

横浜　大橋雅子

椅子八（野毛大道芸）つ積んで曲芸風光る
春港脚伸びやかな少女達
咥へたる巣組みの小枝戸袋へ
高だかと桐の花咲く岩亀横丁
豆飯や豆顔並べ炊き上がる

横浜　福田雅子

逢ふ人のあるぞ嬉しき聖五月
夏夕べ兜太の追悼号抱へ
母いませばセル着る季節懐しき

面影の曽良に遭ふかと夏の旅
夏帽と傘を鞄に旅に出る

横浜　山崎　郁子

朴の花咲いて相模の国分寺
開拓の村消えにけり栗の花
白詰草野辺を杖つく夫に添ひ
戸袋にかすかに鳴けり雀の子
母の日の能登のいしるを買ひきたり

横浜　田賀　楳恵

ジャスミンの香りの家となりにけり
柿若葉朝の煎茶の深みどり
潮の香の松ふつくらと青水無月
鎌倉路車夫の腕に汗ひかる
トランペットきらりと初夏のコンサート

川崎　山口　千代子

○マネキンの変りなき顔更衣
思ふやうに運ばぬ足や若葉風
初夏や大吊橋のまん中に
白南風や潮騒高き九十九里
夏燕半欠けの巣に戻り来る

川崎　新妻　奎子

伸びやかに少女の手足レモン水
螢袋もろもろのこと踏みこめず
踊子草フランス山の風強し
アイスクリーム田んぼの畔の昼さがり
干し物に木斛の花触るるほど

鎌倉　恒川　清爾

花疲れ珈琲豆を挽きゐたる
葉桜やここは日蓮説法地
○江の島の裏は絶壁卯波濃し
姉逝きて庭一面の姫女苑
歳競ふ六人兄弟端午来る
葉桜や吾はらからの年長に

逗子　卯辰　美苗

仮設所に大きく座る春の闇
桜月夜ひとり居の母ふるさとに
福島や向日葵供ふ観音堂
きのふけふ筍飯や母若く
明けてより波うねり出す青嵐

横須賀　武井美代子

行く春や波打ちぎはの焚火跡
手びさしにあまる日ざしや夏めきぬ
薔薇園や沖に空母の泊りゐて
藤の花顔へ落ちくる切通
いつぽんの桐咲く里の棚田かな

横須賀　織田みさゑ

鶯や砲台跡にしきり鳴く
十畳の大凧上る練兵場
○伊勢暦を夫はたよりの種下し
影武者の筍に足とられけり
遅ざくら一夜城址の楔石

茅ヶ崎　三澤治子

アカシア咲くさびれし独歩のケア病舎
風薫る本丸跡に女学院
○夏来るピカソの青の空と海
一人暮し部屋に小さな冷蔵庫
母の里の新茶ですよと供へけり

伊勢原　佐藤和子

山の子や蕗の葉つぱを傘にして
小満や小花を密に梅もどき
○神田川渡れば匂ふ椎の花
十薬や女ばかりが残されて
刃に透ける新玉葱の甘きかな
出来たての代田に雨のざんざ降り

松本　中條今日子

大正の香りほのかに内裏雛
夏隣歩きだしたる赤子かな
香りたつ野天の木風呂春の月
山桜松より太く育ちけり
でぽぽと鳴く山鳩や子供の日

静岡　大村峰子

籠売りの越中訛麦の秋
虎杖のぽんとよき音して折れる
昨夜の雨牡丹全き息を吐く
魚屋にカーネーションの売られをり
○柳絮とぶ中の一つの折り返す
たまさかに肩叩き合ふ蟻と蟻

静岡　曽根満

花ふぶく墨堤木歩終焉地

銀杏の芽亜浪の書なる木歩句碑
花に酔ひ言問橋に佇めり
胸高の帯のいただく桜餅
暁の雷や憲法記念の日

静岡　藤原千代子

風五月水切り籠に皿を立て
仰け反りて乳ぜる赤子や山滴る
青胡桃大吊橋を一歩づつ
くちなはの濡れ色草を揺らさずに
猿啼くや筍梅雨の寺の山

静岡　海野　勲

退院や真っ先に見る山桜
つくしんぼ景章句碑へ頭を揃へ
ダム辺りの水ひたひたと猫柳
歩行器の我を囃せり初燕
黄の牡丹コップに挿して師を偲ぶ

静岡　海野みち子

露座仏へ深山つつじの色の濃き
昼蛙姿見えねど鳴き頻る
今朝咲きし牡丹に早も蜂の尻
病衣のゴム緩めて夫の更衣
○庭木刈る夫のリハビリ風薫る
茶摘時四時起きしたる遠き日よ

静岡　宮崎知恵美

花の薬夫の背中を滑りけり
プリーツの解るごとく蝶の翅
波のごと幾度も寄す糸桜
花の屑吹き上げてゆく路線バス
さくらさくら空を隠してしまひけり

静岡　宮崎みゆき

竹秋や僧の説法聞えくる
晴々と古墳の裾のすみれかな
凧揚げの河原に声の高くなり
祝凧村に男の子の生まれをり
山法師の花や羚羊木道に

静岡　荻野加壽子

一夜さのもう筍といへぬ丈
忌の母へグリーンピースの卵とぢ
夜の更けて八十八夜のざんざ降り
修司の忌道は道へと続きけり

白牡丹ゆたかに襞を重ねけり

静岡　長島　操

芋植うる沢山なれと声掛くる
踏むまじく菩提寺の庭落椿
ものの芽や英霊の碑の磨かるる
山椿重ねて葺きし花御堂
庚申塔へ淡き緑の花五倍子

静岡　小川　明美

啓蟄や狐穴てふ村に入る
うぐひすや屋根うねりたる長屋門
花樒水子地蔵へをとこ坂
啓蟄や大人ばかりの玩具店
花万朶砂利を鳴かせて乾門

静岡　藤本　節子

暴れ川の風存分に鯉幟
山裾に固まる家並田水張る
木洩れ日や岸向く蝌蚪の尾の揃ふ
北斎の版画自在に紙魚走る
逃水に眼鏡外して又掛けて

静岡　大長　文昭

蜥蜴出づはがねのごとき肌の艶
里桜香具師のたぐれる地割縄
天井へ茶を揉む湯気の立ち昇る
源流に迫る夕闇河鹿笛
○子の掬ふ網に川蝦薄青き

静岡　加山　ひさ子

逃水を追うて信濃の県境
牡丹に時ゆつたりと過ぎゆけり
草餅や終活話盛り上がり
○十能のごとき手のひら夏炉焚く
蜥蜴の子すでにきらめく青さかな

富士　神田　美穂子

みちのくや土筆と杉菜一時に
桜しべ掃き寄せ父の忌を修す
山葵田へ富士よりの水落としけり
集乳車桜吹雪の中来る
畦道に軽トラ独り耕せり

みよし　山内　なつみ

花は葉に雨の広島しつとりと

若鶏の卵小さし夏来る
看護師の手のぬくもりや若葉風
レモンスカッシュ半分程は吹きこぼれ
声淋しき北へ帰らぬ小鳥かな

富山　若島久清

掌に掬ふ蝌蚪のお多福顔可笑し
もぞもぞとモリアヲガヘルの泥まみれ
田植機の道中泥水したたりて
雨雲に山車引く引かぬと悶着に
たらちねの月命日の柏餅

射水　成瀬真紀子

光り合ふ代田と散居の黒瓦
立山のおほふ日和や田を植うる
実桜や尾山神社に堀の跡
神門へ風や椎の香濃く淡く
母の日や母の育てし花を愛で

金沢　岸川素粒子

六道の辻踏み迷ふ朧かな
子と手繰る古き記憶や春の雪
○満行の煤け紙子や二月堂
螢烏賊冷たき恋の火を燃やす
物種を播きて親しむ地の香り

金沢　田村愛子

雉子鳴けり能登七塚をめぐりゐて
山畑の放置田今は花菜畑
千枚田うるほす水や風光る
うす髭の少年つまむさくらんぼ
みどりさす金具錆びたる船箪笥

金沢　新保ふじ子

報恩講能登の土産の味噌まんぢゆう
卓袱台の竹の子飯を包む湯気
赤ん坊あやし上手のちやんちやんこ
草刈り機操るシャツの汗まみれ
よいしよと声かけて立つ日向ぼこ

金沢　井村和子

鼈甲屋隣る刷毛屋や麻暖簾
地上地下三度乗りつぎ街薄暑
七不思議抱く禅林亀鳴けり
鳥の日やはひはひ競争つと戻り
伽羅蕗に亡き母恋ふる夕厨

金沢　中條睦子

小諸なる古城はどこも囀れり
桃咲いてひと色となり古戦場
犀川の水引く庭や杜若
柿の花昼はさびしき飯屋街
オペラ歌手ホールに春を広げたり

金沢　今越みち子

吾が庭を主のごとく熊ん蜂
薔薇はみな雨に俯き師の訃報
屋久島と鹿児島のお茶母の日に
ほとばしるしぶきを冠り花わさび
宝物殿へ渡り廊下や花楓

金沢　伊川玉子

田水張り棚田に白き雲走る
風鈴の音をたしかめ釘に吊り
蜘蛛の囲に顔まづとられ朝掃除
二軒のみ残る在所や弘法忌
茄子苗に小さき花や何でも屋

金沢　伊藤美音子

夏近し芳香滲むワイン樽
夕暮れは水匂ひけり青柳
綾子句碑常磐木落葉手ではらふ
青梅に紅の兆しや宮参り
神奈備に水の声あり著莪の花

金沢　高田たみ子

掃き寄せてなほ芳しき沈丁花
夏近し如雨露ふきだす水光る
夏来るなんぢやもんぢやの花盛ん
倶利伽羅や夏鶯の声の張り
牡丹や目もとやさしき法然像

金沢　佐野和子

小流れへ胡桃の花の散り継げり
春宵や茂吉秀歌を読み返す
浜木綿に新芽の兆し薬学部
師の墓の供花より春の蚊の立てり
母の日や遺影に庭の草花を

金沢　後藤桂子

麦秋の風の香水の香父の里
幾度も鏡によそほふ祭稚児
雷の空くつ返す能登の沖

腹の虫押さへ切れずに夏立てり
石庭の波の間に降る桜しべ

金沢　豊田高子

湖風や構へ直して巣立鳥
童顔のままに背広や若葉風
曾遊の哲学の径青しぐれ
とうすみの脱ぎたる衣や日に透けて
胎内を出でて浄らや夏椿

金沢　松井佐枝子

うぐひすの調べととのふ櫓跡
兄の家へ仏壇移す新樹光
空つぽになりたる家屋鳥雲に
白蝶に天の使ひと畑の人
山法師白山の襞まざまざと

内灘　塩井志津

余花の雨濡れ色深き靖詩碑
梅青き杜の奥なる綾子句碑
綾子句碑ときに山茶花若葉触れ
緑蔭にまどろむ一人四高跡
湧水のある朝市や夏つばめ

七尾　谷渡末枝

八十八夜糠漬鰯の焦し焼
百姓の生涯現役みどりの日
茶を運ぶ声も涼しき宿女将
郭公や朝の山気を震はせて
亀甲柄織り上がりたり梅は実に

敦賀　石田野武男

木瓜の花みかど遠流の地にひらく
白魚の千のまなこや瀬をのぼる
惑星の一つに住みて田を植うる
鮎を焼く簗場小町と呼ばれゐて
転落死悼む碑のあり青岬

敦賀　山本麓潮

藤垂れて女官姿の唐衣
地を蹴つて馬車引く白馬風光る
晩春の海を遙かに伝蔵句碑
石狩の砂州吹き荒ぶ夏嵐
緑蔭に馬車引き終へし馬憩ふ

敦賀　山本みゆき

里山の湿地にひそむ大田螺

田植機の唸りに湖国日和かな
はまなすの浜の灯台風の棲む
黒船見し高灯籠や卯波晴
緑さす蔵の二階に鬼女の面

敦賀　倉谷紫龍

春の駒馬塞を一気にとび越ゆる
水戸烈士お白洲にちる紫木蓮
山吹や延元の悲話のこる城
山国に三ツ鍬振りて深田打つ
円空の終ひの住処や竹の秋

敦賀　倉谷ます美

○雪の果またぎの拝む山の神
雷の跡幹へ袈裟がけ老桜
千年の手斧の跡や屋根を葺く
あばらやに残る田下駄や夕蛙
古民家の大正窓やつばめとぶ

敦賀　靄田勝子

花見上ぐ青年美しき喉仏
青麦や比叡の風に抗はず
春惜しむ肩幅広き波郷句碑
媛の宮汐除け垣に木瓜の花
水田に蝌蚪百匹の影はしる

徳島　福島吉美

草餅の大ぶり供へ嫣祖拝む
葉桜や東京へ向く総督府
台湾の屋台に買ひしサングラス
マンゴーのま青やダムの水豊か
猫柳無造作に活け繁昌す

徳島　村上和義

鼠戸に舞妓の素顔汗しらず
母の日や仏間に父の写真掛け
祖谷に来て木魚の音や青葉木菟
敵将と並ぶ首塚しやがの花
片蔭の路地に休める鼓笛隊

室戸　安岡みさき

青葉潮海女の息継ぐウモレ碧
南風や海女の生活の磯の井戸
南風へだつこちやんてふ海女衣干す
ももいろの珊瑚でとむる洗ひ髪
○皿盛りのあはび背返りして逃げる

焼網にくねるあはびの命乞ひ　高知　仙頭宗峰

故郷の一夜泊りの明け易し
鉈を研ぐ米寿の杣に水温む
土佐湾に向きを揃へし五月鯉
出水川故郷の土も交じるべし
妻看る瓜揉み上手とはなりて　那覇　前田貴美子

○髪切つて耳鮮しく夏は来ぬ
若夏の風の草色おもろ謡
ゆるやかな坂の途中の花梯梧
登窯休めて伊集の花翳
石越ゆる毛虫真昼の影もたず
雨雲は首里まちあたりソーダ水　那覇　大湾宗弘

相思樹の花の褥に語らへる
梯梧咲く村屋の鐘はガスボンベ
渓越えて赤翡翠の声ほろろ
あをあをと夜気を流せる螢かな
ルリタテハバックミラーの青空に　那覇　比嘉半升

青甘蔗へ日が差しわたり風わたり
村井戸の光溜りへあめんぼう
松風のベンチを一人蟬の声
低く来て赤土吸へり黒揚羽
水牛の睫重たき梅雨入かな　那覇　當間シズ

老農の足裏の白し清明祭
墓山の裾月桃の花盛ん
桑の実の熟るるにまかせ島時間
青歯朶をつたふ水音東産井（あがいがー）
睡蓮を咲かせ里人命長（いのちなが）　那覇　中本清

花伊集やいまやんばるは日の匂ひ
陶房に花伊集の蕊まぶしめり
王墓守る里に湧井の鎮もれり
釣銭に鱗のかわく薄暑かな
水烏賊の腹より太き墨袋　宜野湾　呉屋菜々

南風原陸軍病院壕あと　三句
毛虫這ふ不喰芋分け壕跡へ

「飯上げの道」抜けて五月の空仰ぐ
クローバや鎮魂の鐘鳴らす丘
赤肌の高砂魚ひかる金盥
花月桃宝石めきし重さかな

宜野湾　いぶすき幸

きらきらと小雨にさ揺る花月桃
通ひ路や九年母円らの実の青く
独り居の極みに鳴けり青葉木菟
戦史秘めつぶやきこぼす花福木
滴りの洞窟をたちたる羽音かな

西原　宮城勉

○沖碧く若夏の雲膨れ初む
潮の香のぬるりと鼻を走り梅雨
夏立ちて四日と待たず入るや梅雨
首里城の朱の冴え緩む梅雨入かな
この年も梯梧盛るを逝きたまふ

第十三回大会壇上「沖縄に行きたし」と母森主宰

豊見城　渡真利真澄

うりづんの夜を啼きゐたり孕み牛
初夏や嬰児に下ろし立ての沓
蹲に梅雨の匂ひのしてきたる
吊橋や梅雨冷白き花多く
水鉢の一尺世界夕河鹿

俳句
8月号予告
7月25日発売
予価(本体944円+税)

特別作品一黒田杏子・山下知津子・星野高士

大特集
今さら人に聞けない
定型の底力
▼総論 定型のちから……三村純也
▼俳人に学ぶ「定型のちから」
①高浜虚子 ②石田波郷 ③星野立子
④飯島晴子 ⑤飯田龍太 ⑥金子兜太
▼わたしの定型論 ▼コラム「五七五の誕生」

追悼
鷲谷七菜子
人生と作品 津川絵理子
一〇〇句選 村上鞆彦
一句鑑賞

シリーズ
宇多喜代子の「今、会いたい人」第10回
「芭蕉の手紙」(ゲスト)堀切実(俳文学者・神戸大学名誉教授)

付録
季寄せを兼ねた俳句手帖 秋

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(https://bookwalker.jp/)など電子書店で購入できます。
発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA 0570-002-301(ナビダイヤル) https://www.kadokawa.co.jp/

おいしい話 その⑪

【星砂】

高橋順子

沖縄の離島、竹富島や西表島には星砂と呼ばれる星の形をした砂がある。私はホシスナと呼びたいが、地元の人たちはホシズナと発音している。

私の古里・千葉県九十九里浜にはむかし銀砂という砂鉄を含んで青く光る砂があったが、或る朝それがごっそりえぐられてなくなってしまい、悲しかった。砂鉄業者がトラックで運んでいったようだ。その記憶があって、星砂に憧れ、この目で見てみたいと思って南の島に出かけたのは三年前だった。

星砂は光っているわけではなかった。砂粒にトゲが五つ六つ四つ、星型にきれいに尖っているのもあるし、折れたようなのもあった。白い砂浜に散らばる珊瑚のかけらの影など、緑色に見えるところに手のひらを押し当てて採集するのである。正体は原生生物である有孔虫の殻だそうだ。なぜこんな奇跡のようなものが打ち上げられているのか。しかし珊瑚礁の息を呑むほどに碧い海も奇跡といえば奇跡だ。

その年亡くなった連れ合いへのお土産は星砂とイリオモテヤマネコ・クッキーにした。

公益社団法人 俳人協会

俳人協会編「俳句カレンダー」平成31年版

体裁　月別　表紙とも十三枚綴り壁掛用

内容　表紙　森田峠・星野麦丘人

鍵和田柚子・安立公彦・横澤放川・能村研三・佐怒賀直美・鷹羽狩行・有馬朗人・茨木和生・古賀雪江・西山睦・今瀬剛一・徳田千鶴子・深見けん二・山川幸子・宮城章・白岩敏秀・小川晴子・石井いさお・白濱一羊・岡田日郎

（掲載月順）表紙を含み五一四句掲載

（ジュニアの俳句十五句掲載）

頒価　一部　一、二〇〇円

送料　一部五五〇円／二部七五〇円／三部八五〇円
四部九五〇円／五部～六部一、一〇〇円
七部～九部一、二五〇円／十部以上（実費・宅配便）

発送予定　十月上旬より

申込先　「万象」同人・会員の申込先　（締切　九月二十日）

〒277・0027
千葉県柏市あかね町24－9
内田郁代　Tel FAX 04・7163・6810

※部数と送付先を明記の上、できるだけ各句会で取りまとめてお申し込みください。

同人作品の佳句

内海良太

皿盛りのあはび背返りして逃げる　安岡みさき

珍しい場面を切り取った句だ。作者が安岡さんなので室戸で経営する自身の旅館でのことだろう。お客さんに出した皿盛りのあわびだろうか、それとも厨房で調理中のものだろうか。いずれにしても「背返りして」が具体的で「逃げる」でこの句は決まった。逃げ出したい気持はよく分かるが、と対象と一体となっているような句だ。

満行の煤け紙子や二月堂　岸川素粒子

お水取りで知られる奈良東大寺二月堂。堂縁での篭松明に眼をうばわれるが、内陣では紙子の行衣をつけた僧の厳しい行が続く。満行を迎えた日、眼窩を凹ませ、髭はぼうぼう、紙子は煤けての修行僧が二月堂からでてくる。

紙子という古い季語を二月堂の行事の中から取り出して現代に生かした。

「奥の細道」で芭蕉に随行した曽良の句、〈たゝみめは我手の跡ぞ紙衾〉、この芭蕉の衾も紙子だったのだろ。

雨雲に山車引く引かぬと悶着に　若島久清

豪華な飾りの山車である。近くに黒い雨雲が見えはじめたのが気になる。山車が雨に濡れては大変なので実行委員会では決行か延期かで迷っている。観衆のざわめきを背中に、役員の意見のやりとりが手に取るように聞こえてくる。

気象を相手の物事の判断はなかなか厄介なもの。観衆も巻き込んで「悶着」という言葉が、全てを言い尽くしている。

牛小屋の奥より一閃夏つばめ　山本絢子

燕は自分の身の安全なところに巣を作るという。匂いを気にする訳でもないので、牛小屋などは一番安全なところかも知れない。

作者の眼前を燕が黒い礫となって翻っていった。一瞬の出来事をすかさず判断し捉えたのがいい。作者の感覚が何時までも若々しいのはこの辺にあることが分かった。

ヘップバーン展観て夕暮の若葉雨　三好かほる

オードリー・ヘップバーンが「永遠の妖精」と謳われ活躍した1950、60年代は、作者の三好さんも私も若かった。(私は余計)。出演した映画のポスターや写真、ファッションが集められて一堂に展示されている。見終わった余韻に夕暮れの若葉雨が美しい。

それぞれに来し方をいふ修験宿　山口素基

峰入り行者の泊る宿なのだろう。夏、吉野から大峰山を経由して熊野へ抜ける峰入りを作者の山口素基さんは毎年参加していると聞く。夕食が終わり明日の仕度をしながら参加者同志の自己紹介、来し方も単純では無い。作者にとっては吉野は地元、遠くからの参加者にいろいろ教示したに違いない。

「修験宿」は峰入りの副季語と記憶している。

第十六回「万象」新人賞発表

第十六回（平成二十九年度）「万象」新人賞は、南雲秀子氏（所沢）・大久保進氏（川崎）に授賞と決まりました。

十月二十九日に東京で開かれる平成三十年度「万象」全国俳句大会で表彰します。

万象俳句会

南雲秀子（所沢）

略歴

昭和十九年六月、東京都生れ。平成十四年こぶし句会入会、山田春生先生の指導を受ける。同年「万象」入会、その後「万象」東京吟行句会、青梅吟行句会等に参加。「万象」埼玉支部にも加入。趣味、テニス・水泳・その他（日舞は藤間流名取）

現住所　〒359－0024　埼玉県所沢市下安松九四〇－一六

受賞の言葉

「万象」新人賞有り難うございます。

驚くと同時にとても嬉しく思っております。

東京新聞への投句を機に山田春生先生にご縁を頂き、こぶし句会に入会させて頂きました。俳句の基本から教えて頂き、山田先生には大変感謝しております。その頃、吉原田鶴子先生もおられ、他の先輩方と共に優しく見守って頂いた気がします。間を置かず、井原ミチさんに誘われ「万象」へ入会。その後東京吟行句会にも参加。内藤恵子先生と共に吟行句会スタッフの一員として過ごさせて頂いております。

気が付けば十数年の月日が流れ、内藤先生や原田しずえ先生等諸先輩の方々から俳句に向かう姿勢を学びパワーを頂いております。今回の受賞を機に、一層の努力と精進を、と心を新たにしております。

大久保　進（川崎）

略歴

昭和二十五年十月四日、北海道生れ。早稲田大学商学部卒業。昭和四十九年東京銀行（現三菱ＵＦＪ銀行）入行、定年退職を経て㈱日立インフォネットで九年間勤務。平成二十六年「ＮＨＫ俳句通信講座」を受講。平成二十七年川崎句会、超結社句会「宙の会」参加。平成二十七年「万象」入会。

現住所　〒210－0848　神奈川県川崎市川崎区京町二－二四－七－五〇五

受賞の言葉

この度は栄えある「万象」新人賞を頂き有難うございます。

授賞のご連絡を頂いた時は、晴天の霹靂と戸惑いを禁じ得ませんでした。

川崎句会に参加させて頂いた頃は、俳句のイロハが緒についたばかりで、心許ない私に温かい励ましと根気よくご指導いただいた柳澤宗正さんと新妻奎子さんに心より感謝申し上げます。また、諸先生方や沢山の句友との素晴しい出会いも、句作を後押ししてくれたと思っております。

まだまだ粗削りな私ですが、真摯に俳句と向き合い、「万象」の一員として、微力ながらお役に立てるよう精進して参りたいと思います。

［新人賞受賞作品］

編集部抄出

南雲秀子　二十句

七福神詣で賜る七日粥

峠路の落葉けちらす鴉かな

冬すみれ観音堂の径険し

団子焼く香のただよへり梅の里

囀りや青梅に鉄道馬車の駅

芽柳の風やはらかき船着場

松の芯こぞる将軍お上り場

牧場にパン焼く匂ひ姫女苑

げんげ野に忘れられたる三輪車

香具山につかの間の虹大きかり

玫瑰の実の色づくや溶岩の径

どぶろくの幟はためく陣屋跡

小流れをとび交ふ谷戸の塩蜻蛉

銭湯の大煙突を照らす月

刈入れの棚田に秩父音頭かな

せせらぎに色鳥つどふ奥武蔵

読みかけの本伏せて煮る大根かな

熊除けの鐘吊る鉢形城址かな

冬の蝶ふいに消えては又現るる

投句箱くくりてありぬ冬桜

［新人賞受賞作品］

編集部抄出

大久保　進　二十句

回廊を急ぐ宮司の足袋白し
年の瀬の長蛇の列の一人かな
松陰の文机一つ日脚伸ぶ
大寒の荒ぶる枝の曲りかな
手の窪に虹のひと粒しやぼん玉
大甕に傘の四五本春の宵
祖師像の厚き手の平涅槃西風
それとなく席の決まりし花筵
羽ばたけばカメラの連写風光る
大谷池にモネの彩り橋涼み
五月雨や蘆花の書院の薄明り
竹林の風のざわめき梅雨きざす
見上ぐれば見下ろす闇の佞武多かな
ひと山のひとつひとつの茄子かな
境内の末社の数や地虫鳴く
秋思ふと銀杏大樹の樹皮の瑕
椎の実の小石に紛れ踏まれけり
一木の朽ちて茸のひとならび
冬の海レンガ倉庫の日のにほひ
冬凪に水尾荒立ててタグボート

第十六回「万象」新人賞の選考経過

今年度の新人賞選考委員会は、五月五日（土）の中央句会終了後、四時三十分より、東京文化会館四階の応接室で行われた。

主宰の意向で、今年度より従来の選考方法を改め、次のように手順を踏んだ。

① 推薦人（主宰が指名）十四名に、最大二名の推薦を依頼。

② 主宰による推薦と併せて、事務局が候補者リスト（二十九年度の「万象」誌入選句数等を記載）を作成し、推薦人からの推薦書と共に選考委員に送付。

③ 選考委員（主宰、並びに主宰が指名）はそれらの資料、「万象」誌掲載句、各自が収集した情報等を予め吟味し、選考委員会に臨む。

④ 選考委員会では推薦された全員について審議し、話し合いによって授賞者を決定する。

今年度選考方法を改めた理由は、次の三項目である。

① 推薦人、選考委員の負担を軽減する。

② 事務局業務の効率と省力化を図る。

③ 経費を節減する。

推薦人、選考委員、事務局は次のとおり。

〈推薦人〉（十四名）

松原智津子（北海道）　阿部月山子（山　形）
佐藤三男（新　潟）　亀田やす子（栃　木）
中村千久（埼　玉）　沢辺たけし（千　葉）
山田春生（東　京）　柳澤宗正（神奈川）
神田美穂子（静　岡）　井村和子（石　川）
山本麓潮（敦　賀）　福島せいぎ（徳　島）
呉屋菜々（沖　縄）　前田貴美子（沖　縄）

〈選考委員〉（四名）

内海良太主宰　小林愛子副主宰　飛高隆夫万象作品選者　江見悦子編集人

〈事務局〉（二名）

藤田裕子　古川京子

審議の結果、第十六回「万象」新人賞は、南雲秀子氏（所沢）と大久保進氏（川崎）の二名に決定した。授賞は平成三十年度「万象」全国俳句大会で行われる。

以下、選考経過。

十四名の推薦人からは計十四名の推薦、主宰からは二十八名の推薦があり、候補者リストには三十五名の名前が挙がった。推薦人からの十四名は、主宰推薦と一致していた。

選考会議では、年間の入選句数、将来性、句会活動、支部

活動への積極的な関与、年齢等を考慮して、リストに挙げられた三十五名について審議し、左記の六名を最終的な候補者とした。

〈最終的な候補者〉

氏名	住所	年齢	年間入選句数
北浦詩子	(北海道)	55歳	36句
澤　照枝	(茨　城)	68歳	36句
南雲秀子	(埼　玉)	73歳	35句
杉浦一子	(東　京)	74歳	37句
大久保　進	(神奈川)	67歳	36句
石川裕子	(静　岡)	71歳	38句

選考委員の発言の要旨は以下の通りである。

北浦詩子　素直な作風で、若々しく新鮮な句が多いが、写生がまだ十分ではない。伸び代もあり、これからが期待できる。平成二十六年入会。

澤　照枝　平成十五年入会。丹念な写生の姿勢に好感が持てるが、ややパターン化しているか。地域的なハンデがあり、今後の句会活動を援助する必要がある。

南雲秀子　堅実な作風で安定性がある。東京吟行句会ではスタッフとして活躍、今後支部活動の活性化に寄与できる人材である。平成十四年入会。

杉浦一子　感性豊かな句が目立つが、やや観念で作る傾向がある。写生の勉強を深めることで新たな展開が期待できる。平成二十三年入会。

大久保進　NHK講座で俳句を始め、「万象」入会は平成二十七年。超結社の吟行句会にも属し、句材の幅が広く自在な句作りである。六十代であり、今後の支部活動の力となれる。

石川裕子　類想句が少なく、日々の暮しの中での作句に優れている。「万象」創刊時からの会員。

「万象」の同人・会員は合計五百名弱、北海道から沖縄まで全国に亘っていますが、高齢化と、それによる同人・会員の減少は明らかで、句会活動、支部活動、また本部の活動には、より一層の知恵と工夫が必要となって来ています。

本部でも、各組織運営の整理と幹事役の負担軽減、経費節減を始めとして、全国俳句大会の分担制、中央新年俳句大会の改訂等、出来るところから見直しを図っており、この新人賞の選考方法の変更もその一つです。

これからの「万象」の継続と健全な発展のためには、俳句力の研鑽と向上は勿論ですが、組織運営にも力を尽くす人材が必要とされます。

生き生きとして楽しい「万象」を目指して、一緒にやっていきましょう。

（文責　江見悦子）

選考の感想

「万象」に新しいパワーを　内海良太

十数名あげられた新人賞候補者の中から　南雲秀子さん、大久保進さんの二人に新人賞の授賞が決まった。

南雲秀子さんは、最近着実に力をつけてきた。句会活動や各種大会にも積極的に参加して自らを高めている。

ともすれば型にはまった句になりやすいが、今後は視野を広げ自由な発想で新しさを目指してもらいたい。

〈玫瑰の実の色づくや溶岩の径〉などは、季語の玫瑰の実と溶岩の径は新しい関係の発見だ。

大久保進さんは、以前から俳句に親しまれていたと聞く。対象を捉える確かな眼があり、安定した力がある。年齢的にも神奈川県支部の大きな期待に応えられる新人だと思う。

〈見上ぐれば見下ろす閣の佞武多かな〉佞武多と自分の視線に緊張が走る。即物具象の佳句と思う。これからも即物具象の写生を地道に推し進めていただきたい。

以上、選考会議の意見の交換でも、お二人の授賞に納得できる発言が多かった。万象俳句会も大いに期待している。

新人賞選考方法を今年度から変更した。四名の選考委員は毎月の会員作品を注目し活動状況を聞いているので、候補者をすぐ絞れたようだ。万象俳句会を取り巻く環境が大きく変わっている現在、環境の変化に対応しながら、「万象」に新しいパワーを注入して行くのも選考委員の役目である。

新人賞選考基準を踏まえ、新人賞に相応しい二人の授賞を喜んでいる。

新しい力に期待を　小林愛子

今年度から新人賞の選考方法が変更された。「万象」俳句会を取り巻く環境が大きく変わり、これからもかなりの速さで変化するだろうと推測されるからである。選考委員の一人に指名されたが、事務局のサポートと準備期間でスムーズに候補者を挙げることが出来た。

選考委員会では色々な意見が交わされたが、最後はみな納得してのことだった。新人賞に相応しい二人の受賞を喜びたい。

南雲秀子さん

囀りや青梅に鉄道馬車の駅

投句箱くくりてありぬ冬桜

大久保　進さん

松陰の文机一つ日脚伸ぶ

見上ぐれば見下ろす闇の佞武多かな

自然な流れ

飛高隆夫

主宰から選考委員に指名されたが、「万象作品」の選に携わっているわたしとしては、とりあえずは、オブザーバーの役割に徹しようと思っていた。しかし、いったん会議が始まってしまえば、わたしもいいたいことをいっており、議事は意外なほど順調に進んだ。

二人受賞ということも、自然な流れの中でいつの間にかそうなった、という感じである。

南雲秀子さんは特に吟行句に佳句が多い。

かなかなや杉丸太積む名栗村

投句箱くくりてありぬ冬桜

大久保進さんは季語のあしらいが確かである。

松陰の文机一つ日脚伸ぶ

大寒の荒ぶる枝の曲りかな

お二人の今後の活躍に期待したい。

お二人の受賞を喜ぶ

江見悦子

事務局から送られてきた候補者リストを見て、「新人賞の選考基準」をもとに、自分なりの基準を設けて候補者を絞った。二十九年度一年間の入選句数、年齢、所属支部や句会の現状等を、私なりの選考の基準とした。結果として六名に絞り、それぞれについて入選句を抜き出し選考委員会に臨んだ。

結果としての二人受賞を喜びたい。

南雲秀子さん、固有名詞がやや気になるが、吟行で良い句に恵まれていることがわかる。発見と感動に基づいた、確かな写生の目を感じる。

香久山につかの間の虹大きかり

投句箱くくりてありぬ冬桜

大久保進さん、ものに見入る写生の目と、実感に裏打ちされた表現の力を感じた。

大寒の荒ぶる枝の曲りかな

三脚の肩に重たき薄暑かな

お二人の今後の活躍を応援したい。

小千谷縮の里

山本絢子

父母恋ひて訪ぬる越後若葉雨

老鶯や八海山は雨の中

闘牛の小屋の中より夏つばめ

黒牛の眼やさしや朴の花

雲蝶の飛天の欄間夏に入る

料亭に小千谷縮の白暖簾

縮の祖祀る御堂や夕焼雲

菜の花の岡に順三郎の詩碑

階にももんがの子の動かざる

青葉闇木喰仏に触るるかな

久しぶりに訪ねた夫の両親の故郷。小千谷縮の里として栄えた時代もあったが、現在は、闘牛、錦鯉の里でもある。文人としても詩人の西脇順三郎、直木賞の鷲尾雨工、「風」同人の目崎徳衛氏、共に小千谷中学出身と聞く。

西福寺の石川雲蝶の彫刻の素晴らしさに、刻を忘れた。小栗山観音堂には、木喰仏三十五体が並ぶ。微笑仏三十三体に、思わず頬が緩ぶ。正面に「柳宗悦」と書かれた額が飾られていた。

初夏

荻野加壽子

あぢさゐの毬雨の色晴の色
香水のをんな猛獣館に入る
像の無き像の台座や花は葉に
歩いても歩いてもなほ新樹かな
初夏やキリンは雲を咀嚼中
白靴の踵を踏みて反抗期
薄暑光卯月小助てふジャガーの名
木のベンチ石のベンチや若葉風
中天へ日ラムネの瓶のラムネ玉
黙黙と夜空の色の髪洗ふ

我が家から車で約五分の所に日本平動物園がある。十年余前まではよく訪れていたが、久しぶりに出かけてみた。動物の種類も展示施設も展示方法も随分様変わりし興味深かった。平日故かファミリー客は少なかったが、昼近くになって野外授業らしき小学生達が三十名ほど入ってきて一気に賑やかになった。

強くなる日差しに汗ばむほどで、ライオン等は木陰に寝そべっている。ここは自然も句材も豊富である事に改めて気づかされた。

段ボールの底が抜けさう瓜の苗

内海主宰の句集『青嶺』の「花ゆうな」の章の一句。一読してとても愉快な、しかし放っておけないという、読者の気持が引きつけられてしまう句である。それは中七の「底が抜けさう」という措辞による。何故このようなことになったのだろうか？

この句は余計な事柄を一切省き、今にも底の抜ける寸前の段ボール箱とその中にある瓜の苗という二つの「物」をポンと読者の前に投げ出している。そのありようはやがて読者の自由な想像の中に着地することだろう。

段ボールで運んだ苗は何に使うのだろう？　胡瓜の苗がそれとも糸瓜の苗か？　私は夏に省エネの話題の一つに上げられる蔓性の植物を使っての日除け、つまり緑のカーテンを想像した。作者は近くの園芸店へ必要な材料と苗を注文した。瓜は凸凹の肌が特徴の苦瓜であろう。糸瓜に似た黄色の花がつぎつぎに咲く。果皮に独特の苦味があるが果実は栄養価も高く夏バテ防止にも良い。

早速注文の品が届いた。段ボールの箱はかなり重く、今にも底が抜けそうだ。慌てて蓋を開けて見ると瓜の苗には、たっぷりと水遣りがしてあったのだ。段ボールはギリギリの重さに何とか耐えたのである。この句には読者の気持を離さない楽しさがある。

（山下良江）

かぶと虫鎧は井伊の赤備

初出は、「万象」誌平成二十四年十一月号に〈兜虫井伊家の色の赤備〉として掲載されたもので、推敲されて句集『青嶺』では冒頭の一句と成ったようです。

兜虫は甲虫類と言われる昆虫で翅は四枚あるが上翅の二枚と頭の外皮がとても硬くて、まるで鎧・兜を付けたようで、男の子の大好きな昆虫である。

この句の眼目は、この兜虫の上翅を鎧に、「井伊の赤備」と見立てて断定した事である。

井伊とは昨年の大河ドラマ「女城主直虎」でも話題となった徳川幕府譜代大名、彦根藩の井伊家である。

「赤備」は甲冑などの武具を赤や朱の色とした軍団編成で戦場では目立つため、特に武勇に秀でた武将が率いた精鋭部隊である。井伊直政の赤備は小牧・長久手の戦いで先鋒を務めて奮戦し、「井伊の赤鬼」と呼ばれ恐れられた。以後幕末に至るまで彦根藩は赤備を基本としていた。

確かに兜虫の色は黒みを帯びた朱色で雄は立派な角を有して櫟などの甘い樹液を好み、この縄張りを争う時は角で相手を投げ飛ばす事もあり、戦場で戦う兵士を連想させてくれる。この兜虫を「井伊の赤備」と表現したことは、全く言い得て妙と言う他はない。

（奥　太雅）

散髪のあとは選句や初炬燵

沢木欣一先生と前書きがある。

散髪をなされた先生の男前が彷彿とさせられる。

私は平成五年の頃より沢木先生が逝去されるまでの約八年間、「風」同人出句の取纏め係を担当しておりました。当時は宅急便などまだ無くて毎月三回位に分けて風木舎に届けていました。その折々には四畳半の部屋に招かれ、大きな湯呑みと蜜柑のころがった切炬燵で、時には中食などご馳走になりましたが、掲句の様な先生の選句の様子も拝見しました。先生は鋭い目差しで時々「採れる句が無いなー」などと呟きながら首をかしげたりしておられ、今もその様子が目に浮かびます。

掲句、選句をなさる身を正すための散髪とも思われるが、言うまでもなく選句には的確な目差しが必要であり、反面優しい目差しも必須。

その様な選句の厳しさを「散髪」に、反面優しい目差しを「初炬燵」の季語に託している。

この「初炬燵」の句を拝見したとき、私は往事を思い出し、先生と時間を共有した懐かしさにかられました。

余分なことは言わず、即物的に把握した句は少しも危なげがない。その作句姿勢を学びたい。

（谷田部　栄）

カフェ床屋パン屋蕷売り迷宮路

平成九年、ポルトガルの旅で詠まれたこの句には「リスボン最古のアルファマ地区」との前書きがある。十八世紀のリスボン大地震の被害を奇跡的に免れたこの地区は、ムーア人の支配を受けた九世紀頃、市の中心であった。後に、地震被害の再建の中心から外されて、漁師や労働者の住む町となってしまったが、大切な歴史的遺産であると同時に現在進行形の生活者の町でもある。

さて、形式に囚われることなく五つの名詞をずらりと並べた斬新な感覚の掲句。畳みかけるようなリズムが、旅先で解放された作者の弾んだ心を読み手に伝える。石造りの建物が連なる路地に足を一歩踏み入れると、そこはまさに石畳の迷路。道幅は狭く、急な坂もあって車はもちろん入れない。間口の狭い店が居並び、二階の窓辺には色とりどりの洗濯物が干され、生活感に溢れている。見渡せばカフェの隣に床屋。パン屋の近くでは、売り声も高く蕷を売っている。パステル・デ・バカリャウと呼ばれる郷土料理、干し鱈入りのジャガイモのコロッケあたりではなかろうか。晩秋の散策に疲れた旅人には、熱々の揚げ蕷の味は格別であったはず。迷宮路の街に憩う人々の笑顔や話し声、息遣いまでもが感じられ、何とも旅情をそそられる。

（久留島規子）

俳句異界への扉

❖その時、俳句手帳
加古宗也

❖巻頭三句
橋本榮治
宮田正和
千原叡子
坂口緑志
筑紫磐井
吉田千嘉子

❖俳句と短歌の10作試験
安里琉太
鈴木加成太

❖今月の章
マブソン青眼
武藤紀子

❖好評連載
下谷二助 新・新宿物語
筑紫磐井 俳壇観測
大牧 広 すぐれた俳句達
神野紗希 口語俳句の技法
間村俊一 の装幀交友録
二ノ宮一雄 一望百里

わたしの戦争体験

俳句四季 Haiku Shiki

2018年8月号
7月20日発売
定価930円(税込)
http://www.tokyoshiki.co.jp/ 東京四季出版
〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

毎月25日発売
定価1200円(税込)

月刊俳句界 2018年8月号

特集 故郷を想う
～誰もがもつ故郷、その魅力

●論考～故郷の句の味わい方
大輪靖宏
●故郷の句とエッセイ
櫂 未知子　荻原都美子
矢須恵由　一枝 伸
中澤康人　商橋悦男
山本千代子　名村早智子
谷口 洋　堀本裕樹
鎌田 俊　神野紗希
谷口慎也　野ざらし延男

特別作品50句
中村和弘

〈グラビア〉俳句界NOW 加古宗也

特集 恋を忘れていませんか?
恋の句の引力
福田若之　西村麒麟　大高 翔
浦川聡子　坊城俊樹　冨士眞奈美
岩淵喜代子　後藤比奈夫

【如月真菜対談】青木亮人

＊セレクション結社「鳰の子」柴田多鶴子

私の一冊 次井義泰「花苑」

対談 毒蝮三太夫(タレント)
佐高信の甘口でコンニチハ!

別冊 投稿俳句界
一流選者27名!
日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性があります。

株式会社 文學の森
お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

特別作品評（6月号）　水野加代

水温む　西本才子

このところ同人句会でお目に掛かることがなかったので、三島を訪ねた作品を発表されたことは喜ばしい。衰えない行動力と作句力は何処からくるのだろうか。

枯蘆の向う岸へとこぞり伏す

水辺を豊かなみどりで彩っていた蘆も時がくれば枯れる。三島ならではの枯蘆の姿がはっきりと映像化され、印象鮮明な句となった。風の強さも言外に。

富士の裾海まで伸びてクレソン畑

雄大な景観を詠んでいる。手前に広がるクレソンの青が美しい。現場に立った作者の気分は晴れやかだったに違いない。下五の字余りが少々気になる。クレソンの別称「川高菜」「みずがらし」の斡旋も考えられるがクレソンの量感を表現するには必要な字余りとも思われる。

家裏を湧き水はしる雛の家

富士山の伏流水が湧き水となり川となる。写生の効いた句であるが「家裏」「雛の家」と「家」の重なりが惜しまれる。季語の再考を。

初蝶のつまづき四つ目垣越ゆる

丁寧に対象と向き合っている。危なげな初蝶の翅づかいを気遣う作者の優しさはリズムにも。四つ目垣を越え初蝶の向かった先は…初蝶のいのちを見届けようとする作者の目。何時までもお元気で俳句を楽しんで頂きたい。

オホーツク海高気圧　玉田瑞穂

エッセイによれば「オホーツク海の春は、澄んだ薄いブルーに包まれて美しいのだが、何故か春愁とは違う重い気分が払拭されない」と書かれており、作者の豊かな感性が窺える。ものに託して力強く、細やかに道東を表現した一連の作品となった。

海明くるロシアの岳の白さかな

流氷が去り、船舶の航行が可能となる日を「海明」とよんで、流氷の傍題である。空の色海の色に対する眼前の岳の「白さ」が際立ち、張り詰めた緩びのない風景が広がる。流氷は去ったが、北方領土問題の解決のきざしは見えない。

春塵や乾びし雑魚の面構へ

市場の片隅に転がっている雑魚の存在を詠んだのでは。片岡球子の「面構」シリーズを思い浮かべながら、雑魚の顔付きを想像してみた。雑魚には雑魚の命の輝きがある。

海市失せ港に大き気圧計

どのような映像が現れたのであろうか。僥倖に恵まれた作者の旅に思いを馳せる。「海市」と「気圧計」の取り合わせは虚と実の対比。「気圧計」の存在が動かない。

永き日の梯子を降りる船大工

すっかり昼間の時間が永くなり仕事も捗る。衒いのない詠み振りにより、仕事を終え梯子を降りる船大工の気持の余裕が伝わってくる。

同人作品評（六月号）

広瀬俊雄

剪定の女小まめに大胆に　林陽子

木の剪定、特に松は難しい。松は切る場所によって、幹から新芽が吹かない。それを見分けながら小まめに剪る。時には重なり合った枝を思いきり切らなければならない。この女の人はプロか？　剪定の妙をしっかりと詠っている。

六斎てふ二、七の市や雪解水　佐藤雄二

六斎というのは、仏教の斎日（身を慎み災いを避ける日）の一つ。これに因んで月に六回行われる市を六斎市という。この句の二、七の市とは、二と七のつく日に立つ市と思われる。これを数えれば全部で六回、すなわち六斎市である。

木目浮く花袋旧居の縁ぬくし　駒形祐右子

田山花袋は、明治十一年から八年、館林城内の旧武家屋敷に住んだ。この旧家は、館林第二資料館に保存。藁屋根で、正面右手に入口、左手に八畳二間の縁つづき。「木目浮く縁」である。季語「ぬくし」でおだやかな春の一刻を表現。

紅梅や迷へば右に曲がる癖　水野加代

俗に無くて七癖という。この程度の癖なら格別に困ることもないだろう。これを三回繰り返せば元に戻れるかも、ただし角度を考えないと。探梅の作者が、途中の分かれ道で、どっちに行くか迷った末にいつもの癖で右に曲ったのだろう。

春光や佛に千の手と眼　山口素基

この句は、千手千眼観音が春日に輝いていると詠ったのだろう。普段は暗い本堂にある観音に今日は春光が。さればご開帳の日か？　何処の観音様かは不明だが、千の手と千の眼で、衆生を済度する観音菩薩であることにかわりない。

草餅にどれも指跡蔵の町　内海保子

藏の町というと、川越市が頭に浮かぶが、栃木市も有名。この句からは、どこの町か分からないが、蔵座敷などで有名なのだろうと想像。どの草餅にも指跡があるというのが、微妙で気になる。

黄水仙ギリシャ神話を読み返す　吉村光子

水仙と言えばナルシスト。作者もそれで、ギリシャ神話を読み返した。話はギリシャ神話に登場する美少年ナルキッソスが、紆余曲折の末、水面に映る自分の姿に恋をして死に至る。少年は死後に水仙になったと伝わる。花言葉は異なる。

ベイブリッジ巨船のくぐり暮遅し　西本才子

本牧埠頭と大黒埠頭を結ぶ吊橋である。海中より立ち上がる高さ一七〇米の二本の支柱で橋を支えている。橋桁は海面より五五米で巨船の通過には高さ制限があり、潮の干満も関係する。二〇一五年にクイーン・エリザベス号が引き潮時に間に合わず神戸港へ急遽変更したという事件があった。「暮遅し」に、ゆったり進む巨船の姿が重なる。

芋観音の赤き幟やご開帳　大橋雅子

私には、この句の芋観音というのが珍しかった。昔、疱瘡は「イモ」「イモガサ」と呼んで恐れられた。この観音にお願いするとその難を免れ、かりに罹患しても軽くすむと信じられ、芋観音と崇めた。三月上旬のご開帳には、里芋の煮転がしと甘酒が振る舞われるという。

九十を越えし女将や山笑ふ　中條今日子

作者は松本市の郊外、浅間温泉で旅館を営むと聞く。九十を越えた女将とは驚きである。松本市を取り囲む美ヶ原や常念岳など、周辺のふっくら膨らむ山々。季語に女将の若さの秘密が想像される。

山笑ふ富士やはらかく裾を延べ　神田美穂子

富士山の景観は場所により様々。東京方面からは、前面に箱根や丹沢を配し、甲府方面からは御坂山塊が。この句は富士市方面からの景観を捉えている。マニアの話題に、富士が見える最も遠い処は？がある。なんと、福島県や和歌山県から超望遠カメラで写した記録がある。

取り上ぐる仔牛湯気あぐ浅き春　若島久清

作者の同時句に、牛のお産に夜通し関わったという句もあった。そしてついに出産したのだ。母親の胎内から出てきた仔牛は、暖かく全身から湯気が立ちのぼっているのだ。命の神秘を感じさせられる句だ。

あぢさゐの芽吹き初めたり一笑塚　高田たみ子

一笑とは小杉一笑。金沢の茶商であり茶屋新七ともいう。芭蕉に傾倒し、貞門から貞享四年頃蕉門に入る。芭蕉は、奥の細道の帰りに一笑に会うのを楽しみにしていたが、その死を聞いて〈塚もうごけ我が泣く声は秋の風〉と嘆いた。犀川近くの願念寺境内に一笑塚がある。

春昼の干瀬やジョン・万上陸地　渡真利真澄

干瀬（ひし）は、珊瑚礁の浅瀬である。「春昼の干瀬や」現場の情景が浮かぶ句となり感慨が伝わる。良く知られているように万次郎は、天保十二年十四歳の時に土佐沖で遭難し、鳥島に漂着。数ヶ月後アメリカの捕鯨船に助けられアメリカに渡った。船長の養子となり教育を受ける。波瀾万丈の十年を過ごし、嘉永四年、糸満市の大渡浜に上陸したという。

台湾の旅

村上和義（徳島）

金色の布袋の笑みや春日ざし

ガジュマルの気根を揺らす春の風

二輪車の押し寄せて来る街の春

海峡の沖の軍艦黄砂来る

眉毛濃き女憲兵風光る

ためらひて臭豆腐食ぶ春の宵

釈迦頭を屋台に食ぶる夜市かな

春の宵蛇の唐揚げ見て過ぎる

父の忌に

喜多尾明子（日野）

夏つばめ川音近き生家かな

明易の天井木目遠き日々

父の忌の父の居場所や籐寝椅子

法の膳整ふ座敷若葉風

年増して父似母似よ豆の飯

桐の花もつとも高みに寺の屋根

葉桜や僧手招ける回廊に

山の墓地へ一列著莪の花明り

万象ノオト

テーマ「帽子」

帽子は髪の毛

東京　須賀允子

私にとって帽子は頭髪の代りなのである。父が五十歳で他界し自立しなくてはと上京。サロンドシャポーに三年、アルバイトしながら帽子作りを学んだ。

帽子は小さいから洋裁より簡単と、安易な考えであったが、帽子製作には木型が必要、木型代りにチップという型作りから始めて、自分のデザインに合わせて型紙を作り、材料も夏はレース、冬は毛皮等を揃え、自分の作品を一点物として日本橋高島屋、三越に並べる喜びもあった。

結婚して子供が生れたので止めてしまったが、五十代半ばに大腸癌を患い頭髪が抜けだした時、帽子が身近にあって助かった。私の布の帽子は折りたためて便利である。上京した時帽子作りの道を選んだのも、神の深い配慮であったと、今にして思うのである。

高くついた帽子

土浦　澤　照枝

二年前の八月、孫の大学進学を祝い、小学生の孫と私達夫婦での京都・奈良二泊三日の珍道中四人旅の事。

夏の京都は御多分に洩れず暑い。邪魔と帽子を持たずに来た主人は耐えきれず奈良に着くや否や一つ目を購入。お寺巡りも順調に、ご朱印デビューの孫と共に沢山のご朱印に満足。二日目の京都の宿に着く頃には何処へ？　主人の帽子が見当たらず…二つ目購入。

最終日の観光も終盤へ、気付けば日傘を持っていた筈の孫も日傘を紛失、仕方なく三つ目の帽子を購入となったのでした。（下の子と私はアングリ）

二人共どうなってるの！

そして暑い京都に、帽子に、振り回された思い出深い珍道中は、新幹線の心地良い揺れに夢の中へと誘われました。あの時の帽子は今も活躍中！

嬉しいプレゼント

千葉　柳澤道子

父は私が幼い頃亡くなったのですが、その父が闘病中に俳句に出会い、新潟と奈良と離れた距離があったものの奈良の御夫婦と俳句を通して文通をしていました。父を亡くした私達姉妹を不憫に思ったのでしょう、奥様からプレゼントを送ったとの前もってお手紙を頂いており、大きな方は邦ちゃん（姉）、小さな方は道子ちゃん（私）と書いてありました。それは楽しみに待っておりましたら、りんごの木箱に他の物と共に、姉には大きな鍔のついた帽子、私にはベレー帽が入っていました。

奥様はプロの洋裁師で、手作りのそれは美しい帽子でした。あまりの嬉しさに母が写真屋を家に呼び、帽子を被った私達姉妹と母と祖母が畏まって写真に納まりました。帽子を被った家族写真を御夫婦に送ったのでしょう。

帽子は波にのって

横浜　奥野周光

街に出ると、年配のご婦人の帽子姿を多く見掛けるようになりました。

公園で蝶を捕えていた男の子が、一陣の風に帽子をとばされ、ミッキーがミッキーがと、夢中で追いかけて行きました。やっと追いつき、「ヤッター」とさけんでいます。きっと大好きな帽子だったのでしょう。よかったわね。何かとてもうれしくなりました。

幼き日、赤い紐で結んだ麦藁帽子を冠り、波打ち際で遊んでいた私は、波に巻き込まれたそうです。近くにいた方に助けられました。気がつくと、帽子、帽子、と泣いていたそうです。私は覚えていませんが、母が話していました。帽子は波にのって行ってしまいました。遠い遠い日の事ですが、私にも、大好きな物があったのです。

帽子と私

小松島　岡田あゆみ

私は帽子をたくさん持っているが、気に入った帽子に出会ったことがない。

一番の理由は、頭が小さいこと。好みの帽子はほとんどプカプカ。県に唯一の百貨店でSサイズを勧められて買っても、結局かぶらないことが多い。

次に、丸顔。丸顔が帽子をかぶると達磨になる。特に冬の毛糸帽子は暖かくてうれしいが、髪はつぶれるし、おしゃれとは程遠いものである。

後は、首が短いこと。日よけのつば広帽子は、肩に引っかかるのと、重みで前が見えなくなってくる。

日本人に帽子が似合うのだろうか。もともと帽子は西洋文化である。西洋人の体型に合ったファッションである。ということで、私は帽子におしゃれを求めるのはあきらめた。

でもいつか、私に似合う帽子に出会えればいいな。

帽子あれこれ

佐倉　立原千代子

私は帽子が大好きである。今から十数年前のこととなるが、帽子づくりを有名な先生から教わった。

先生は近くにお住まいで、ご高齢でいらしたが、とてもモダンな優しい方で、短期ではあったが基本的なことから帽子の勉強をした。布選び、型紙の裁断、芯の貼り付け、縫製、ちょっとしたことで、形が収まらない。帽子は魔物で、興の深いものと感じた。

帽子は、かぶったときにほんの少しの角度や折り方をアレンジするだけで別の帽子かと思うほど違う表情が生まれ、かぶり方を楽しんで鏡の前で練習することが肝要と思う。

麻生大臣も見るからに帽子がお似合いで、とてもおしゃれにお見受けする。

街中を歩行中、素敵な帽子に出会うとふっと目をとめるものである。

「万象ノオト」投稿募集

▽12月号「音　楽」（8月末日締切）
▽1月号「ごちそう」（9月末日締切）
▽長　さ　本文 17字×19行以内
▽投稿先
〒168－0071
東京都杉並区高井戸西2－18－1－1107
久留島規子

私の一冊

樋口桂子著

『日本人とリズム感』

大村峰子

本書は、リズム感から辿り着く日本文化論である。取り付いてはみたものの些か専門的で、そんな所はどんどん読み飛ばしていった。

「あなたはリズム感が悪すぎる」と著者が突きつけられた衝撃の一言。どうしてリズム感が悪いのか。そんな疑問から始まったリズムの謎を巡る冒険は「生のスタイルは人の行動をかたどり、身体のリズムと言語のリズムを形成する」ということを軸に文学、絵画、歴史、文化、風土などあらゆるジャンルを横断して、ヨーロッパとは全く違う日本独自のリズムの正体を明らかにしていく。このことに加え、もう一つの切っ掛けが面白い。著者は友人とその又友人であるイタリアの男性とタクシーに乗った時のこと、二人のイタリア語の会話を見るともなく見ていると、相槌とうなずき方が全く逆だと気付いた。「そうそう」という時友人は首を縦に大きく下に振る。ところがイタリア人の男性は寧ろ上方に向かっていた。しかも打つタイミングが彼女とは違って、一瞬間をおいて俗な言い方で言えば「裏拍」で、つまり一拍目と二拍目の間に「ン」を入れて「ンタンタ」と刻むときの「タ」のところで打っている。相槌の打ち方は用いる言葉によって違う。相槌は言葉の一部である。相槌を下向きにする日本人の感性は、より根源的なものに由来しているのではないかと、その時思ったそうだ。そして頭の隅にあったこのことが、日本人のリズム感と表現の傾向を考えてゆくひとつの切っ掛けになったというのだ。

日本の生のスタイルとして著者は稲作を基盤に置く。鍬を大地に打ち下ろす運動感覚は身体の中に下向き内向きの型を生み、苗を植える為に後退的な運動方向を身近にした。そして稲作の作業で他人と協調して動作を揃えるリズム感が育っていった。稲作の共同作業には「最初に強拍を置くことと、二拍と、その反復形の四拍のリズムを共有することが相応しかった」というのである。

二拍四拍のリズムが簡潔に表れたのは俳句、短歌である。状態を模写する擬音表現のリズム感にも稲作の作業が反映している。そればかりではなく、葛飾北斎の構図を分析すると「富嶽三十六景」の「尾州不二見原」や「神奈川沖浪裏」に見られる回旋する円弧や水平の構図は稲作の目線に通じるというのだ。

リズム感に善し悪しはあっても万国万人基準は同じと疑いもせず過ごしていた私には、驚きと発見の連続だった。著者の飽くなき好奇心と探求心に脱帽である。

郷土の俳人⑯

続「沼の詩人」石井とし夫

千葉

内海保子

「ホトトギス」同人、石井とし夫氏については「沼の詩人」として、平成二十八年、「万象」六月号で一度紹介されているが、昨年六月遺句集『米寿まで』が刊行され注目を集めているのでもう一度紹介したい。

遺句集『米寿まで』には第一句集、第二句集、また平成二年に第一回日本伝統俳句協会賞を受賞した「印旛沼素描」と、それ以降の作品と併せて千五百句あまりが収められていて、「写生の鬼」と称されたこの俳人の六十七年間にわたる句業をつぶさに知ることができる。

石井とし夫氏は大正十二年八月、利根川と印旛沼に挟まれた千葉県印旛郡安食(現在は栄町)の生れ。千葉県庁に勤め、父親の影響で昭和十九年より「ホトトギス」に投句、高浜虚子の選を受け、その後高浜年尾、稲畑汀子に師事し、平成二十三年没まで「ホトトギス」の俳人として生涯を貫かれた。

石井とし夫氏の作句の現場の印旛沼は千葉県北部に位置し、水面十平方キロ余の沼で、琵琶湖の約六十分の一と大きくない。沼を取り巻く風景は平凡そのもので、石井氏は「私には何時も大きな水溜りと思って眺めている」ともいっていた。

古代の海が塞がって沼となってから数千年。今日、沼にまつわる故事、歴史、困難だった干拓治水事業の話などが伝わるが、現在は平穏な沼の景色である。沼を生活の糧とする人々へ愛情の眼を注ぎ、自然をつぶさに観察し、作句し続けた俳人石井とし夫氏の姿勢には学ぶべきものが多い。

作句信条として氏は三つの歯車の連動をいう。

一、実相観入＝心を澄ませて自然を見つめる。
二、見極め、把握＝一歩踏み込み真実を見極める。
三、客観描写＝十七文字の中に作者が入っている。

沼の雑魚良夜に育ちをるならむ
野火一つ沼の中まで燃え走る
沼空を声ひっぱって雪加ゆく
稲妻に沼の輪郭見ゆるとき
鴨の陣端からめくれ翔ちにけり

「ホトトギス」の畏友深見けん二氏は『花鳥来』第一〇七号で、「私は、昭和末から平成にかけて、お住まいの印旛沼に誘われて、氏の車で二人で吟行し、沼の生活の中の季題が実感出来ました」と述べている。

俳書探訪

古川京子

『鶴』（六月號）第八七六号　主宰　鈴木しげを

昭和十二年九月、石田波郷が東京で創刊。師系水原秋桜子。古典と競い立つ、現代に生きる打坐即刻の韻文精神、を掲げる。新緑を背に大社が描かれている表紙には季感がみちている。目次は横書きである。

主宰詠「椿餅」二十六句より

さへづりや山桑の木の岐れみち

白椿波郷生誕百五年

春あけぼの扇びらきに遠欅

静やかな詠いぶりだが、二十六句という句数に主宰としての意気込みが窺われる。

「飛鳥集」より

わが街にふさふ大きな春の虹　大石悦子

春の日がころげてきたる膝の上　橋本末子

渓川の流れに力花万朶　石川恵子

蝶青く詩の行間をゆくごとし　谷ゆう子

他に「栗葉集」「鶴俳句」がある。

今号の圧巻は「昼をこぼれて百日紅」の項である。四名が六頁にわたり、百日紅について健筆を揮っている。その一部。

☆猿も滑る木？　百日紅…桑原みわ子

散れば咲き散れば咲きして百日紅（ひやくにちこう）　千代女

百日紅は、どんな呼称で中国より渡来したのか疑問に思っていたが、苦労の末に…「この樹、もと皮なきがゆゑ、和俗〝猿すべり〟といひ、歌には〝猿なめり〟と詠ず。中華にいふところの猴刺脱の名、みな通ず。」を見つけた。

☆百日紅の大寺…山本修巳

大寺の三本大き百日紅　修巳

佐渡へ流罪となった日蓮や日野資朝にゆかりの阿仏坊妙宣寺は重文である日蓮の真筆三通を所有する。その一通は阿仏房の妻千日尼へ宛てたもので「……阿仏坊に櫃を負わせ夜中に度々御わたらせありし事、いつの世にかわすらむ、ただ悲母の佐渡の国に生れかはりてあるか……」と、感謝の気持ちを綴ったもの。又、世阿弥作の謡曲「檀風」は寺に眠る日野資朝の息子阿新丸がモデルになっている。本堂の傍の三本の百日紅は咲く期が少しずつずれている。

☆帯纏き出づる…先崎幸江

女来と帯纏き出づる百日紅　波郷

波郷はこの句に女は必要ない。真夏の男臭い若々しい身振りを失っていない句、と自解している。　……等と。

俳句と文章それに漁火や麦茶等の挿絵がバランス良く編まれていて、そこはかとなく気品が漂う俳誌である。

波郷の思いが色褪せることなく息づいているということかも知れない。

（筆者住所〒277－0083　柏市日立台2－4－22）

公達に狐化たり宵の春　蕪村（夜半叟句集）

福田雅子

拙文前号は、蕪村の狸の話であった。今回は狐。公達に化けた狐である。公達の語について古語辞典を披見すると、①諸王、皇子、皇孫。②貴族のむすこ（まれに娘）貴公子。

この句では②の方であろう。仏に化けた狸は「秋のくれ」であったが、公達に化けた狐は「宵の春」の出現となる。

蕪村は狐狸譚、妖怪譚が好きである。この世に起こる森羅万象に、理詰めでは解明出来ない不可思議な要素があることも感じとっていたにちがいない。

『蕪村句集講義1』（東洋文庫）に掲載の子規、鳴雪の解説を紹介しよう。

「公達は貴公子の事で高位高官の人の息子、それに狐が化けた宵の春といふので、矢張なまめいた春の塩梅を見せた。

狐は一方に怖しい感じのするものであるが、又た他の一方ではなまめいた所もある。蕪村は多く狐をかゝる所に用ひた」と子規氏。

鳴雪氏曰く「少し小説めくが、私は之も矢張女の許に狐が公達に化けて通ふので、何かの拍子にそれが露れたやうな事と思ひます。宵の春などいふと女を連想するのは私一人かしら」

愚見でも然り。実は狐が化けた眉目秀麗の公達が女の許に通うのであって、春宵の朧の中、女の許に通う公達の正体は狐であったのだという種明かしめいた句なのだと思う。

古今著聞集（橘成季著の説話集・建長六年成立）に「変（變）化」という章がある。例えばその中に「大納言泰通の五條坊門高倉の亭は、父侍従（従）大納言の家にてふるき所なり。相つゞきてすまれけるほどに、狐おほく常にばけゝり」云々とある。蕪村の『新花摘』の文章の部に、晋我という翁の話が出ている。下總結城の人である。ある時、風筐の許に泊り、書院に寝ている時、「月朗明にして宛も白昼の如くなるに、あまたの狐ふさ〳〵としたる尾をふり立てゝ広縁の上に並びゐたり」と記す。その光景は想像すると、ぞく〳〵する怪しさを醸し出すものの、その場に居合わせて刮目してみたい気も起こってくる。

幼少時、火鉢に手をかざしながら、こういった類の話をよく祖母から聴いたものである。現代の子供らなら一笑に付すだろうが、その頃強ち荒唐無稽な話だとは思わなかった。

ここで蕪村の妖しい雰囲気の狐の句を挙げておこう。

春の夜や狐の誘ふ上童　遺稿・夜半叟

上童とは貴人に近従する少年、それを遊びに誘う狐。

狐啼てなの花寒き夕辺哉　せりのね　安永八年

夕方の菜の花畑、狐の不気味な啼き声で身の竦む寒さ。

草枯れて狐の飛脚通りけり　（明和年間）

『蕪村俳句集』（岩波文庫）の註に依れば、秋田には藩の書信を江戸に送達する狐がいたと『甲子夜話』にある由。

上岡佳子（栃木）　巻頭作家（七月号）プロフィール

上岡佳子さんは昭和十七年下都賀郡部屋村（現栃木市）に生まれ、昭和三十六年県立栃木女子高校を卒業後、藤岡町役場（現栃木市役所）に就職、平成十五年三月課長職を定年退職、その四月から三年間、藤岡町立図書館長等の要職を全うされた。

俳句は定年を機に「新樹句会」に入会、大信田梢月氏に写生俳句の基礎を学ぶ。平成十六年九月「万象」入会。初入選句は

検診を終へ薔薇の枝剪定す
緑蔭の茶店を僧侶出で来り
十八年には大坪主宰の佳句に、
椋鳥の並びて電線太くなり
黒塀をやすやす越えし冬の蝶

一句目、重みに耐える電線の感覚を称賛。大信田氏亡き後は亀田やす子氏の「佐野吟行句会」に参加、現場に即した写生俳句の熱意ある指導を享ける。

佳子さんは周りの信頼も篤く、句会の幹事・吟行係等をお任せしている。

又、現職時より音楽・書道・水墨画・日本画等多くの趣味をお持ちで、とりわけ日本画は繊細な感覚、緻密な手法に見事に熟達され、現在も続けている。その美的感覚は俳句の写生に如実に現れ、美を見極める写生眼は句作の確かな礎となっている。

平成二十五年十一月に初の四句入選。二十六年四月、而して昨二十九年度は四回選ばれ、飛高隆夫先生の佳句には

薄き日に藪の奥より初音かな
沙羅の花白きを引きて落ちにけり
うねりては夕日を返す芒原
夕されや初鴨の陣ととのはぬ

一句目、地味な句だが作者の感動は伝わる。二句目、沙羅の花が一筋の白い光を（色を）引きながら落ちてきたと見届け、思い返した。三句目、風に波打つ芒原が夕日を押し返し、押し戻しているかに思えた。時間をかけて見るといろいろなことが見えてくると、飛高先生の丁寧な評はエールとなる。

そして、待望の巻頭四句、

花筏渦を巻きては解きては
花に明け花に暮れたり須磨の旅
歯朶萌ゆる熱田の宮の築地塀
初虹や七色全て惜しみなく

佳子さんのお子様二人は既に独立され、「渡良瀬遊水地」を間近な地に、優しいご主人と二人の閑静な日々。ご実家は約十キロの近さにあり、嘗て栃木と江戸の水運で栄えた「部屋河岸」。俳句に適した環境と造詣の深さが相俟った独特の俳句を、楽しく続けられることを願っております。

（増田幸子）

万象作品

飛高隆夫選

新治の里の明るき柿若葉　土浦　澤　照枝

廃校の最後の茶摘終へし子等

田植機のをちこち唸る日曜日

竹落葉光まとひて舞ひにけり

引継ぎの書類こまごま木瓜の花　静岡　石川裕子

ひらかなのをさなの手紙あたたかし

食卓で済ます宿題昭和の日

柏餅仏も頭数のうち

風薫る赤城の嶺に雲ひとつ　益子　光岡れい子

轆轤挽く手のしなやかや柿若葉

空色の少女のシャツや夏来たる

茅葺きの厚き唐門苔の花

生きるもの皆やはらかき五月かな　札幌　中鉢弘一

石狩の浜の丘より揚ひばり

雨意の空青鷺の子を懐に

花片を止め一閃蜘蛛の糸

草書体空に散らして鳥帰る　江別　太田佳美

母の日やマザーテレサの深き皺

ビルの隅渦巻く落花積む落花

蝦夷富士の底力なり雪解川

逃水を追うて走者の走りたる　静岡　望月敏男

沼照りやぽつりぽつりと蛙の目

木の芽山怒る風神雷神像

麓より昇り切つたる桜かな　川崎　大久保　進

咲ききつて香の解けたる牡丹かな

後ろ手を解き腕組む大牡丹

春深し昔ながらのナポリタン

海を指す辻の標や街薄暑　那覇　謝花寛営

黙々と土と語りて耕せり

教会の山羊が草食む遅日かな

昇降機立夏の街をのぼりけり

紫陽花や朝の雫のうすみどり

麦の穂に白き風あり暮れなづむ　栃木　上岡佳子

読みさしの文庫本伏せ窓若葉

一雨に白の際立つ山法師

葉がくれの青梅の臀紅兆す

木苺を含みにはかに母恋し　静岡　吉野美智子

開け放つ蔵の高窓鳥雲に

川砂の湿りを舐むる蝶の群

蕗煮るやひすいの色を山盛りに

泥を割り無垢の白なる水芭蕉　札幌　勝木享子

梅林の千のかをりを游ぎをり

日の斑濃し水を打ち合ふ鴨の子等

トタン屋根に弾む雀や春のどか　北浦詩子

白波の魚道に落花ひつきりなし

朝市に大漁旗と鯉幟　札幌　佐々木　茂

仔らの声羊舎に満ちて草萌ゆる

御神楽の一節ごとに早苗植ゑ

によつこりと阿蘭陀独活の太き芽の　園田鶴子

初蝶や途切れしままの立ち話

剪毛の羊の乳房あらはなる

鷺の巣は風の揺籠青葉して　高山晢英

廃坑の真闇出づるや百千鳥

ひた眠る赤子立夏の足垂らし

護摩果てて青葉に僧の仁王立ち　竹重富子

柵沿ひをしるべのやうに蝶行けり

石畳あるかなきかにすみれ生ふ

青鷺のひな伸びあがる青空に

子どもらの足のジャンケン山笑ふ　田邊政代

水月や落花に影を仄めかせ

山躑躅比ぶものなき緋に燃えて

羽搏けば畳のやうな青鷺来　長田秀行

摺り足の指になじます祭足袋

場所取りの花莫蓙に爺大あぐら

ほろほろと千島桜の散りはじむ

若葉風にれの巨木に鴉の巣　八代洋子

新緑の園に行き交ふ車椅子　札幌　横山康博
雪残る山裾真白花こぶし　吉田克己
沼の端のすくへば動く蝌蚪の紐
時ならぬ雪の降りけり子供の日
春うらら手形足形初ひまご　新庄　曽野部礼子
花時計針収まりて風薫る
京ちりめんつるし飾りに風光る
武家屋敷白根葵のひそと咲く　新潟　斎藤ヨシ
千畳のかたくり山の花は実に
武家屋敷やけに多かり蝮草
山独活を売る人に聞く調理法　榊原キヨ子
今日も雨川面の桜白じろと
耕や子の手を借りて畝三筋
座りよき椅子に一句や夏来たる　佐藤幸示
潟舟に小さき座布団春惜しむ
庭石にわんさわんさと蟻の出づ
ぼやけゆく図書の活字や春の昼
みどり児の頬を染めけり春夕焼　佐藤シズエ
学食の声賑やかや白木蓮
鶯やここは釣人駐車場
四月尽友達出来し園児かな
パン買ひにつなぐ小さき手聖五月
うす紅の名は笑顔てふ雪椿　新潟　髙野松風
木の梯子に昭和の墨痕風光る
留守番や昼餉に二個の笹粽　中塚滋子
高階にのぞむ薄暮の街立夏
隙間なき鳥居千本夏立てり
初夏や日々彩深む園の樹々　燕　渡辺志ま
逝く春や行者にんにく根付かずに
春愁や子らの残しし貝の殻
脛見せて立てる西郷花ぐもり　宇都宮　安久都　登
赤信号頭上かすむる初燕
酒蔵の白壁に映ゆ柿若葉
凜として桐の花咲く武家屋敷　福田　弘
夕薄暑製材の音ふつと止る
鎧着る順番を待つ子供の日
透し見るビニール傘の夏落葉　芳賀　塙　テル
富士山や裾の清水の浄財箱
青空を狭しと燕旋回す
大揺れの大樹にからむ藤の花　福武幸子
髭ぬらし清水を飲める漢かな
陽炎ひてクラシックカーの歪みくる
階の苔に華やぐ落椿　真岡　上野恭子
木洩れ日や山葵育む水の音

山城の斜面に燃ゆる躑躅かな　佐野　荒川　進

山男の清水旨しと喉仏　栃木　飯塚キミ

みちのくの宿の雪洞夕桜　飯塚満里子

銀嶺を彼方に枝垂桜かな　島田和枝

朝まだき門前町に燕来る　高田貴子

しやぼん玉追ひ掛くる子のかがやけり　店網洋子

鑁阿寺の濠に真鯉と春落葉　寺内まち

遊水地の太き野蒜や犬走る

襞白き遠山花の城址かな

春風と小夜の中山越えにけり

電気柵囲む茶畑風やさし

天地返しの土匂ひたつ穀雨かな

花通草雨の雫のむらさきに

大谷石の岩屋を塞ぐ蔦若葉

谷戸深き空き家の垣の濃山吹

初物は寿命伸ぶてふ蕗を煮る

餅草を思ひ切り入れ搗きにけり

大杉の木肌を伝ふ緑雨かな

麦の穂の静かに揺るる夕茜

朝の庭白山吹の眩しかり

百年を経し白藤の匂ふなり

梧桐の大きな瘤に雀来る

草に生る蝶々低く飛びはじむ　佐野　永澤千代子

古墳山より老鶯の響きくる

古碑の文字薄れてゐたる花の寺　仲山さよ子

天井の龍の目動く若葉風

空青し五葉躑躅の白極む　松田富夫

石段を狭め左右の著莪の花

菖蒲葺く千本格子の町家かな

鹿の子の尾の裏白く逃げにけり

蓋をして守る麹や青嵐

雲巌寺木啄句碑の苔青し　和光　板垣陽子

けやき若葉五階の窓に届きけり

過ぎてより甘く香るや薔薇の垣

白と薄紅姉妹のごとき花水木　新座　多田英治

スーパーのレジに茄子苗売られをり

新緑の夕餉地酒の呑み比べ

大釜で筍茹でる道の駅　栗田文代

幾重にも古木に絡み藤の花　川越　岡野輝子

ぼうたんの崩るる朝の湿りかな

新緑や羅漢の瞳もの思ふ

菓子横丁シナモン匂ふ薄暑かな

沼風を吸うて泳ぎし鯉幟

山門の古りたる草鞋若楓

すずらんの一叢ありしちひろ墓所　川越　鈴木アキエ

手馴れたる婆の寄り合ふ茶摘みかな　津金房子

藤揺れてフラダンサーの腰ゆれて

囀や甲斐に残りし狼煙台　山下とし子

この家に男の子をるんだ幟立つ

庭先の定位置に来し朝の雉　山本敦子

五月来る日差しに匂ひありにけり

筍の掘跡に撒くお礼肥

建売りの売れて人住む柿若葉

若葉風芙美子の旧居開け放つ

新樹光回廊をゆく婚の列

若葉風染工房の伸子張る　坂戸　守山勝江

魔女伝説残る古城や薔薇咲けり

村上に鮭の幟や風みどり

雨蛙外湯のふちに来てをりぬ

道灌の遠駆けの里濃山吹　所沢　南雲秀子

老鶯や豆腐をひやす柿田川

富士山のすそに広がる芝桜

山寺に龍の彫刻夏の雲　千葉　大月玲子

開け放つ門へふはりと夏の蝶

新樹光板碑の文字の消えかかる

新茶淹れ昔話を新しく　高田みや子

釈迦堂の五百羅漢や牡丹咲く

若葉風欄間ぶだうの透かし彫り

渡舟場を発ちしばかりや花菜風　酒々井　小林あけみ

荒鋤の罅や落花の吹かれゆく

本尊とつながる手綱薄暑なる

教会を出てそれぞれの夕桜　佐倉　有泉正夫

教会の長椅子固し春しぐれ

母の日の嫁が持参のくさやかな

人込みに馬の匂ひのして立夏　竹内　実

苺摘む時々味見などと言ひ

芍薬の先づひとひらのひらき初む

田水張る張らぬ田もあり遠筑波　横川良子

蕺草も名札をつけて植物園

爆音を近くに聞くや阿旦の実

高空へ桂若葉のうすみどり　四街道　塗木翠雲

たんぽぽや語り継ぐべき地震の事

葛飾の風に太りし鯉幟

抽んでて著莪は日陰の明りなり　船橋　入河　大

松の芯開基開運成田山

新しき船の就航こひのぼり

知らぬ児にばあばと呼ばれ夕桜　内田節子

墨堤のたそがれ長し仏生会

歩を止めて花びら大地にとどくまで　船橋　槐島　修
むつみあふ初蝶風にのりて消ゆ
吾妻橋真中に立ち居朧かな　近藤澄子
緋躑躅のむらさきに映ゆ夕月夜
雉子の声ききつつ朝の散歩かな　宮本加津代
初蝶の消えてゆきたり竹林
しばらくは桜吹雪を浴びてゐし　石川幸子
青葉風宝剣加持を受けたまふ　松戸
葉裏より廻りて来たる天道虫
曇り日は殊に明るく白牡丹　菊岡緋路
蜘蛛の囲の小川またぎて光りけり
奥の院より出で青葉若葉かな　渡部洋子
色褪せぬままや給びにし桜貝
新聞に巻きてたかんな置かれたり　野田成夫
つばくらめ橋なき川を飛び交へり
火事跡の残る柱や松の芯
畦みちの入鹿の墓や鼓草
母の日や軍事郵便文箱より
頼家のこれが墓所とや草茂る
山吹や雨の参道暮れゆける
青空にとどけとけやき並木の芽
万緑の池面に映ゆる静寂かな

阿武隈を越えて桜の郡山　市川　奥澤よし江
喜多方の茶屋に風佳し蓬餅
磯料理風もひと味夏来たり
水鳥のひとすぢの澪芦の角　東京　赤松わ子
路地奥の日射しに映ゆるミモザかな
花筏堰を一気に流れ落つ　新井世紫
樟若葉見上げし空の青さかな
流れの音聞きつつ歩む姫女苑
強風に吹かれ対岸の栃の花　安藤美酒々
聖五月シェフ屋上にハーブ摘む
藍染の日傘きりりと売られをり
円窓を額縁として花菖蒲　石山風童
鳥帰る丸屋根白き給水塔
花菖蒲朝の散歩の立話
川合ひに白鷺一羽風薫る　岡村純子
水際の瘤よりぢかに花二輪
おぼろ夜や母の歌声なつかしき
囀りや大木の空満ちあふれ　北口富栄
山藤の枝垂るる瀞や川下り
桐の花百戸の村の集会所
ひさびさの里の夕べや遠蛙
驟雨去り鼓高鳴る花簪　草間三香子

春霞ベイブリッジを飲み込めり
四阿にかかる日の斑や若葉風
樹を揺らし水を揺らして風は初夏　東京　桑原優美子

デパートの金魚売場のひつそりと
路地奥に張板並ぶ昭和の日
風光るカヌーの水脈の煌めきて
鈴懸の斑入りの幹や風光る
倒れても歩く二歳児芝青む
太閤の茶の湯の井戸にさくら散る
浅草の地下街の混む昭和の日
夕映えの沖へ帽振る沖縄忌
朽ちてなほ沖向く舟や青葉潮
断崖の暮色貫く岩つばめ
庭の其処だけ夕明り白牡丹
磨崖仏残し里山新樹光
薫風や程よく回る観覧車
香水の一団に会ふエレベータ
草むしり思はぬ嵩となりにけり
五月場所化粧回しにアニメ柄
到来の新茶に湯呑選びをり
マリア像へステンドグラスの春日差し
うぐひすの声もらしたる地獄谷

小池清晴
小池宗彦
下嶽孝一
徳竹良子
中澤桃子
長谷川はるみ

如己堂にななめに春の入日かな
抜きかけて本の崩るる梅雨の入り　東京　東　順子
蟻の巣のふちに富士形見下せり
青葉洗ふ雨や競馬場前の駅
鎮魂や南相馬の花菜畑
若楓緋の傘のもと句作かな
空海の目もと涼やか椎の花
鉢並ぶベランダ菜園紫蘇の苗
和菓子屋のはやばや飾る鯉幟
夏神輿担ぐ狩衣スニーカー
ふるさとの物産展や新茶の香
金鎖揺るるが如し黄花藤
保育所を抱へて泳ぐ鯉幟
鶯や俳句小径てふ岬道
巡礼の野路に続ける菫かな
馬子唄に残る峠や竹の秋
噴水を野鳩も雀も浴びてをり
大川をきらめき上る青葉潮
黒揚羽次々集ふ水溜り
タンポポの綿毛静かに風を待つ　武蔵野　砂地宏子
忙しき郵便局の夏つばめ
槌音や古きプールの消えゆけり

福田ふみ子
藤田信子
松野寿美代
松本幸男
宮脇秋峯

品川の汐水届くくらやみ祭　府中　竹村晃子
暮れゆけば茶摘みの畑は香り満つ
小虫吐きゆつくりひらく牡丹かな　国立　阿部幸子
小流れの水面に揺らぐ花藻かな
大桴の法被のせなに滲む汗　南場雅子
府中祭身体震へる大太鼓
春の宵古き雑誌のダイアナ妃
垂れたる桜に触るる小道かな
新宿や欅若葉を小鳥とぶ　日野　喜多尾明子
骨壺のかさりと鳴りて若葉雨
文したたむ筍茹だるまでの時間
空豆や昔の人の顔に似て　渡辺八枝子
さへづりや外人墓地の闇深き
税関の監視カメラにユッカ咲く
浮橋のきしむ音して南吹く　八王子　栗原紀美
卯の花や石垣被ひ風となる
たかんなや糠吹き上ぐる鍋三つ
ビニールハウス洗ふしぶきの薄暑かな　町田　井上篤子
吹き降りに明けて憲法記念の日
囀りや大樹を背に汀女句碑
吹きつのる夕べとなりぬ豆の飯
蟻出でてさかんに運ぶ芝の虫　桔梗　純

掘りたての春筍笊に路地の店
野毛山にきりんの幟若葉風
若葉風押し寄せてくる夫の墓　横浜　阿部トキ
新しく鍬買ふ八十八夜かな
朝雉子や少し遠くへ足のばす　大駒泰子
園児等がお早うお早うチューリップ
満開の花の真上に大満月
色も香も夕べ深まる藤の花　岡田幸吉
人見えぬ村の一戸に鯉幟
若葉風因幡の山並肩円し
笹巻や汨羅の波のさわぐとき　後藤晴子
永き日や甲羅干す亀泳ぐ亀
茗荷竹石垣に沿ひつんつんと
ふき狩やわいわい言うて分け合へり　坂本具子
井の頭堰に老鶯しきり鳴く
柿若葉小流れに菜を洗ふ人
白芍薬崩るる一ひら紅含む　富田　要
木々の葉の色を重ぬる穀雨かな
初めての帰省待つ門あねかぶり
燕来る湯宿三軒平家村　長野高朋
榛名山麓に雲か梅真白
梅が香を背に一望や伊豆の海

啓蟄や人を吐き出す上野駅　横浜　正木喜美代

平然と歩いて行く子夏の雨　松崎芽ぐみ

五月来る浮き浮きとなり髪を切る　三木豊子

さくらんぼ今日も横目に通りけり　豊　美佐子

初咲のつつじ挿し足す花御堂　川崎　髙野翠子

石鹸玉夕日に浮かび虹色に　安田良子

吾も和して経唱へをり鐘供養　横山ユキ子

青空へ赤子抱き上げ柿若葉

たまに来る風とらへてや風知草

すれ違ふ尼僧に会釈白牡丹

末黒野や山城跡に風走る

山桜果てて準備の田水かな

いつの間に噴煙春の桜島

コーヒーの一杯の間や春の雷

薫風や背になじみしランドセル

五月雨や門灯一つ浮ぶ闇

間隔を決めて種芋埋める爺

大手毬日向薬師の磴を行く

山間の木々の中より藤の花

花びらと杖の乗り込むエレベーター

惜春やさらさらさらと砂時計

休火山がれ場の涯のやまつつじ

山独活の産毛の皮を一剝きす　鎌倉　佐藤千晴

鯉幟ジェット気流に乗りたいな

野毛寄席や円楽汗を一拭ひ

風薫るなんじやもんじやの香の立てり　茅ヶ崎　久保田富士子

切り岸に山藤たるる尼の寺

葉桜や燈籠灯る段葛

湯上がりの散歩清しき菖蒲の日　大和　中谷由郁

噴水の飛沫を浴びんこどもの日

木蓮のひとひら釈迦の瞼かな

花見上げ海見下ろして風の中　伊勢原　長嶋和子

教頭の肩に花片昼休み

女形桜月夜の白き足袋

校庭の真中燕の宙返り　山本カツ子

子等はしやぐ飛花の明るき軽さかな

朽ちかけの蔵窓覆ふ蔦若葉

磨かれし蒸気機関車花の山　秦野　秋山憲三

空見上げ軒見上げては燕待つ

山山の木木は七色木の芽時

囀りや回る明治の赤風車　佐藤嘉洋

花は葉に海望みたる汀女句碑

絵画館へ木香薔薇の門くぐり

落花生蒔きしばかりを鴉の穿る　松田　古谷悠紀子

一番茶刈りし新葉のほてりをり　望月知恵子
茶刈機の音の途切れぬ立夏かな　静岡　望月ゑい子
杉玉を掠め一閃初燕　甲府　江口嘉郎
長々と猫の寝そべる花莚　矢野喜久江
マネキンの腕露はなる立夏かな　望月ゑい子
山桜かもしか崖を登りけり　静岡　岩﨑武士
田起しの土へ降りたる雀どち　興津千鶴子
校庭のどの子にも吹く春の風　繁田たけ子
人あまた居りて静寂牡丹寺　高橋一夫
一輪の牡丹に風の生まれけり　西村まさ
小流れのささやく朝濃山吹　本多ひとみ
落椿春雷句碑を明るくす　天城嶺の緩き稜線春夕焼
地下足袋の小鉤十二個つばめ来る　水仙へ朝の湖風そよぎけり　静岡　望月知恵子
蛇穴を出て地の神の祠へと　朝の日にかたくりの花色増せり　望月ゑい子
虹鱒の横腹のぞき選別す　花吹雪その下猫の通りたる　矢野喜久江
壺すみれ朽ちしままなる水車かな　清明や俄雨過ぐ峡の村　小梁洋子
群れ離す養生の鱒網の中　春寒の杜の梢の波立てり　焼津　小梁洋子
走り根に蘗の濃き緑かな　杣道や椶の芽摘みし跡ばかり　瀬野喜代子
野一面波となりけり杉菜風　春の日や犬のほほんと座蒲団に　津　瀬野喜代子
園児等の鼓笛ばらばらスィートピー　メーデーの空掻きまはす鳶かな　石川純子
切岸の祠に揺るる花樒　葉桜や靴紐しかと門を出づ　金沢　石川純子
水底の光り眩き春の川　アマリリス東西南北見て咲けり　焼津　小梁洋子
やきつ辺や若葉の下の古墳群　川根本　鈴木裕一
喪心のやうやう薄れ五月来る　母の忌に母の好みし桜餅　川根本　鈴木裕一
沈丁の香の吹き抜くる庄屋土間　生意気な口をききたる入学子　原爆ドームあの日を残し暮るる春　津　瀬野喜代子
焼け跡に残る瓦礫や春の草　岩山に鹿の食せぬ馬酔木咲く　秋聲のみち花屑の色残し　金沢　石川純子
菜の花やワインを醸す禅の里　田の神を目覚めさせたる春蛙

昨日焼きけふはつみれに春鰯　金沢　臼村喜久代

暖かや峠の釜飯わけあひて　河野尚子

十二單その名ゆかしき尼の庭　髙木艶子

燕窩よりこぼれし泥の湿りかな　道場啓子

若葉雨欣一句碑の文字清し　山の寺僅かにこごみ干されあり

無人駅つばめ出入りの駅となり　ステッセルの聚の若木芽吹きたる

耳当てて樹の命聞く五月かな　動くもの頓に増えたり水芭蕉

新緑の湧水あつめ神の池　あんぐりと咽見せたり春の鯉

虎杖を噛んですつぱき声発す　擦れちがふ人もつぱ広夏帽子

通るたび銀杏若葉の濃くなれり　的中や弓道場の青葉騒

山の寺僅かにこごみ干されあり　大沢の池に響くは河鹿かも

ステッセルの聚の若木芽吹きたる　笋や湿りの残る今朝の土

動くもの頓に増えたり水芭蕉　初燕万葉歌碑を擦りゆけり

あんぐりと咽見せたり春の鯉　春遅々と地震に遭ひたる古時計

擦れちがふ人もつぱ広夏帽子　夫植ゑし白山吹や忌の近し

的中や弓道場の青葉騒　朝なさなあぢさゐの花ふくらみぬ

大沢の池に響くは河鹿かも　西田秀子

笋や湿りの残る今朝の土　廣田宏美

初燕万葉歌碑を擦りゆけり　宮崎惠美

春遅々と地震に遭ひたる古時計

夫植ゑし白山吹や忌の近し

朝なさなあぢさゐの花ふくらみぬ

岩屋寺なだるるやうに藤の花　谷内瑞江

開き戸に実生の藤や蔓やはら　倍野喜代子

妙義山中腹粧ふ遅桜　金沢　保田ひろ

石垣に染むる新緑皇居かな

珠姫の秘佛を拝む若葉冷

苔に置く椿掃くこと惜しむかな

藤盛る雨の降り出す雲のあり

束ね挿すグラスが似合ふ菫草

初ぎぼし天ぷらにして夕の膳　白山　朝倉みゆき

山吹も白山吹も膨らみぬ

退職を祝ふ宴や初桜

旺盛なる松の緑や天を差す　鶴尾正江

境内の静寂山門春落葉

月影に白の眩しき花水木

五万本丘のつつじのほむらなす　福井　中石紀美代

多羅の芽を揚げものにして祝ひごと

牛百頭草原駈くる朝曇

光る瀬に撥ぬる鮎の背笹黄金　敦賀　内池宏行

鮎香る尾鰭背鰭の飾り塩

先付けに出されし奴冷酒乞ふ

糸切れて空へ意のままゴム風船

夏木立水のひびきを引き寄する

老鶯や山の秀見ゆる露天風呂　敦賀　前川千代枝

山藤に触るる古道の休み石

万葉の碑へかぐはしき白牡丹　山本一枝

卯波寄す能登の渋染風孕む

白無垢の打掛け着たる水芭蕉　吉川禮子

十薬の根のどこまでも広ごりぬ

蓬摘むうつり香のほのかなる　藤原玉泉

朝掘りの筍茹でて祝ひごと

つつましく伊万里に紫蘭活けにけり

一人来て思ひ出つきぬ墓洗ふ　御坊　清水勝子

狛犬の阿吽にとどく青葉光

夏稲妻土偶の眼窩を貫けり

生涯を耕して母老いにけり　大阪　入山繁幸

みな揃ふ夕餉笑顔の豆御飯

山深く青葉若葉に包まるる

生き死にを語らふふたりさくら蕊　明石　前島　幸

薔薇の香をまとひ河畔のカフェテラス

母の日や妻に娘の長電話

踏切の警鐘はるか青田風

春宵の風に冷さ残りけり

安曇野や麦の青さに光る川

筍の生るる力土に罅　徳島　平岡　功

花見ある暮し永久にと藩祖像

残心をぴしやりと封ず花の冷え　宮西修一

一番星映る植田や寺の鐘

花冷をいうて来る客帰る客

鯛焼の餡のうれしや花の冷

山吹や苔青みたる屋敷神　山本瑤子

ガジュマルの樹の下抜くる風涼し

風光る樟と椰子の木多き街

九份やオカリナを聴く春の昼

粘り墨足して緩める春の水　石井　木内マヤ

虻が背を丸め蜜吸ふ昼下がり

象が目を細め餌食む園の春

豊麗に大師の頬や藤の寺　高月　巌

青空を小さくしたり柿若葉

六地蔵藤の匂ひに眼を開く

雀蜂の巣の青海波叩かるる　小松島　田上幸子

スリ多き六合夜市街薄暑

狗犬の口に蜂棲む赤炭楼

同じ色ひとつも無くて若葉雨　福岡　園田清子

のどけしや山頭火句碑撫でゐたる

城跡のみな天を指す松の芯

しろつめ草摘みて作りし首飾り　古山晋介

向き合うて夫婦の飲茶日の永し　古山みどり（福岡）
剪定の樹下幼虫に群るる蟻　宮田千恵子
買ひ手付くふるさとの家豆の花　高山ひさ子（那珂川）
囀や母の病の軽くなり　丸本祥夫（長崎）
ふらここや母の押しやる子の背中　山下敦子（西海）
雨あとの地のひろびろと麦青む　島崎　洋（札幌）
春昼や句碑より句碑と読み歩く　多田陽子
春宵やなかなか尽きぬ温泉街　花村ヨシ子（新潟）
石段を登りつめれば初音かな　稲川清子
石垣の角の崩落草青む　小林元子
燕の巣七つ並びし駅舎かな　渡辺利子（鹿沼）
浅蜊掻く十尺棒の天を突く　磯貝綾子（佐野）
啓蟄の土掘り起こすショベルカー　売野　緑
献血のテントへ降れり桜蘂　大川政子
小鯵釣り青きバケツの並ぶ波止　金子恵子
枇杷の種子口を窄めて飛ばしけり　木村君子
空近く若葉の阿蘇に赤き牛　黒川しげ子
暗渠とて春の小川の音清し　齋藤ミチ子
すれ違ふいつものテリア衣更へ　関口かつ子
子の吹きて母も吹けるやしやぼん玉　新緑や鳶空高く旋回す
夜桜に人来ては酒誉めにけり　山ガール喉を潤す山清水　稲川清子（芳賀）
初夏の池の蛙がぴこんと岩の上　柚子の花垣根を越えて匂ひけり　小林元子
車椅子の母を田植の畦道へ　渡辺利子
初採りの曲りキウリを丸かじり　磯貝綾子
強き香の母の手づくり蓬餅　売野　緑
ぼうたんのひとつ崩れてひとつ咲く　大川政子
ぬくき手と菩提寺に来て合掌す　金子恵子
母好む秋海棠や活けて伏す　木村君子
信濃川雪解にごりの滔滔と　黒川しげ子
さざ波の代田に鴨のつぎつぎと　齋藤ミチ子
葉桜の影揺れてゐる露天風呂　関口かつ子
谷川岳の残雪見上げ弟よ
軽やかなワルツのごとき紋黄蝶
九十九折岩に迫り出す紅やしお
山藤や越えて明るき絹の町
里山の代田離れぬ通し鴨
雨晴れや五月の雲をまぶしめる
コーヒーの香薔薇のアーチの奥にかな
えごの花山の小道を明るくす
アカシアの花の散りたる粗鋤田
芍薬の蕾まん丸紅をさす

山間に揺るる日の斑や二輪草　佐野　菰原美穂子
蜷の道小さきナスカと見まがうて　久田洋康
暮れなづむ空に天使か春三日月　茂木弘子
親鳥へ跳ねて寄り来る雀の子　義本美智江
蜜を吸ふ蜜蜂の尾の揺れゐたり　須藤初枝（さいたま）
行く春の茶屋の縁台雨の中　榎本美代子（川越）
霧晴れて躑躅色濃き下山かな　黒木敬子
隈笹の春日きらきらか御廟跡　常見イツ子
菅公廟の跡へ地つづき踊り子草　岡野惠美子（千葉）
花吹雪車の中であびにけり　喜多恭仁子
夏みかんひとつおちゐる石畳　松浦陵保
葉桜やさつぱり髪をカットして　村田由美子
リハビリに励む窓辺や要燃ゆ　
車庫の梁いつもの所に燕来る　
五月雨や鳩の板塀渡りをり　
鯉幟小江戸銀座の空泳ぐ　
窓開けてラジオ体操柿若葉　
子等の列掠めて空へ初燕　
世界史の動くを見るや遠雷す　
一時間と決めて引く草蚯蚓出る　
棘截りて真白な薔薇を仏壇に　
初桜小野小町のゆかりの地　

ガタゴトと銚子電鉄キャベツ畑　千葉　柳澤道子
塔仰ぐとき新緑のまぶしかり　酒々井　中嶋久登
参道のみごとな鰻さばきかな　佐倉　新谷八郎
泥水の澄めば泥鰌のひげ動く　
伊那谷の朝の湿りや竹の秋　
牡丹散る地に重なればまた牡丹　
風薫る桶の泥鰌は右回り　
湯畑のけむり近くに残る雪　
白き山遠くに見えて春の泥　
山路行く上り初めたる春の月　
手土産につまらぬものとつくしんぼ　
図書館に夕刊くるや日脚伸ぶ　
紅梅の花芽に光る雨の粒　
香煙に手かざす老婆五月晴れ　四街道　後藤誠二
ご開帳にはか信者の多きこと　
アカシヤに巻きつき生くる蔦若葉　船橋　中川泰夫
都忘れ住めば都ぞ断りぬ　
かたばみの沢山咲きて地味な花　
クリークも今は思ひ出菱の花　
滴りて吾も水琴窟の中　柏　鹿毛満子
夏きざすボール追ふ子を鳩の追ふ　
満開の影の重たき糸桜　

花の塵てのひらほどの潦　東京　石井登女

荷をとけば京筍と木の芽かな　梅本不二男

ゆくりなく観る院展や春時雨　潟田真理

日を浴びて日毎艶めく柿若葉　杉浦一子

葉桜を巡査見上ぐる駐在所　鈴木光正

まつすぐにただまつすぐに姫女苑　田崎京子

雑草の穂にて風浴ぶ天道虫　田中明子

茶の渋の黒き掌新茶もむ　鶴田智美

ぽつぽつと玻璃打つ雨や楸邨忌　中嶋かつえ

引きつがれ守り通して滝見茶屋　中ノあさ子

潮みちて来し初夏の浜離宮　中山岳夫

ぺんぺん草鳴らし幼き日に帰る　明月院あぢさゐの花かき分けて　東京　西村サカエ

疎開地の無人の駅や矢車草　沈丁の白き香に目覚めけり　長谷川信也

青葉風川面に躍る日の斑かな　枝垂梅揺るゝにまかせ匂ひけり　平子甲奈

花筏崩す小舟の川下り　透けくの昇降機ゆく朧月　本多葵

夏蒲団かぶりなほせる夜明け前　幼な等の目の逃げて居りサングラス　宮川昭子

根津美術館客を迎ふる今年竹　春浅し牧場を駆くる護衛犬　柴田雅春

国別に競ひ咲きをり薔薇の花　廃校の門柱に散る山桜　佐藤正美

芍薬に未来の名札朱の蕾　鼻先で緑風吸へり堀の亀　鈴木律子

雲雀鳴けふる里の町見ゆる丘　房先の遅れて揺るる長き藤　青木明代

池の面に映り揺らめく紅つつじ　江の島は異国の町か春の午后　横浜　岡元枝

皐月晴観光船で浅草へ　ここち良き風をいただき染卵　加藤和子

竹皮を脱ぐ音幽か風の中　佐藤和子

母の日や音高らかに電話鳴る　柴田雅春

句出来てもペン持てぬ手や桜どき　鈴木律子

リハビリの粘土をいぢり膝裏の汗　青木明代

白梅や妻の遺影によく映る　川崎

初七日にしよげしよげするなと妻が言ふ

水漏るる蛇口のひびや秋深む

朝寒の廊下に消せり常夜灯

たつぷりの代田の水や山の影

河鹿鳴く川瀬にまじり途切れがち

松の芯立ちて秘めたる旅心

風光る書店古書店はしごして　藤沢　湯浅政男

囀りへ妻と朝餉の窓開く　秦野　秋山憲三

白波を立てて白帆や青葉風　小田原　河野貞夫

燕飛ぶ一気に越ゆる郷の山　松本　藤森利子

草藪に頭を出して棒蕨　静岡　杉山　明

錨草もつれて咲きぬ天上山　金沢　北野陽子

山つつじバックの富士とツーショット　新出祐子

山吹の山路対岸に烏帽子岩　水上依乃

参道の長き石階藤の花　敦賀　伊上はるゑ

花筏乱し亀来る沼の昼　大田ふじ枝

海見ゆる寺の回廊日永かな　内藤允昭

音伏せて雉の歩みに近づきぬ　北野陽子

花藤や列車の軋み山に入る　新出祐子

春風に子のおにぎりの転がりぬ　水上依乃

桜咲く四百年の森に立つ　伊上はるゑ

魚屋の売り子のピアス風光る　大田ふじ枝

空の色切り貼りしたる水張田　川口和代

明け遣らぬ枕辺に聞く水鶏かな　中川雅月

ででむしの欲しいまゝなる雨の庭　中村秀一

散る花や明治の鉄路錆深む　吉田紫火

風薫る藤樹の里の水清し　林　早苗

新緑やいぶしづくりの毘沙門天　山本晴美

緋牡丹や黒き格子の飛騨の町　川口和代

卯の花や地の傾きにこぼれをり　中川雅月

春北風夕日一条雲を挿す　中村秀一

桜漬婚約の日の淡き色　吉田紫火

木瓜の花緋のいろ八重に固き棘　林　早苗

寒稽古口はへの字に目に涙　山本晴美

人の波豆撒く方へうねりけり　岡田あゆみ

白足袋に草鞋脚絆や蓮如興　相本和子

夏の日に顔をゆがむる鬼瓦　石原好宏

衛兵の瞬きもせぬ春の昼　鶴田輝代

春うらら空へ微笑む弥勒像　砂川道子

髪揺らし乙女の太鼓ひびく春　

開運の兆しの予感春北斗　

菜の花や堰に賑はふ親子連れ　

中庭にそよぐ葉桜総督府　

三文判の店先にある四月かな　

若葉風くしやみの一つ出でにける　

春昼や山頭火愛でし日奈久の温泉　

八代の城址に立てば緋のつつじ　

藤祭り近し古刹に篳篥の音　

緑立つ牛車停止と石文に　

鶴頂蘭舞ふは厨の窓辺かな　

朝日さす裏の甘蔗畑石村忌

万象基金のご報告

椿垣刊行会　一三口
匿　名　二五〇口
（平成30年5月30日～6月8日現在。受付順・敬称略）

ご協力に感謝申し上げます。「万象」発展のため、大切に使わせて頂きます。

万象俳句会

新入会員のご紹介（30年5月）

本島　廣（神奈川）

全国俳句大会への作品投句について

裏表紙をご覧下さい。締切が八月二十日になっていますが、出来るだけお早目にお送り下さい。多くの皆様からの投句をお待ちしております。

特集　俳句とエッセイで　よみがえる昭和の夏

巻頭作品10句　朝妻力・岩淵喜代子・佐藤文香・照井翠・古田紀一・松尾隆信・水内慶太

俳壇

8月号
7月14日発売
定価800円（税込）

巻頭エッセイ　仙田洋子

八木健選　滑稽俳壇

四季巡詠33句……友岡子郷・中西夕紀

インタビュー　私のメイン・テーマ　戸恒東人

新連載
往復書簡……宇多喜代子×馬場あき子
近代俳句俳人逍遥……関川夏央
新・日本の樹木12選……広渡敬雄

連載
俳句論のゆくえ……坂口昌弘
子規・仰臥六尺……復本一郎
人生に効く、俳句……小島　健
俳壇時評……天野小石／俳壇月評……渡辺誠一郎

俳句と随想12か月　遠藤若狭男・笹瀬節子

本阿弥書店　〒101-0064
東京都千代田区神田猿楽町2-1-8 三恵ビル　電話 03(3294)7068 振替00100-5-164430

万象作品の佳句

飛高隆夫

廃校の最後の茶摘終へし子等　澤　照枝

小学校か、中学校か。この学校には年中行事の一つとして、全校生による茶摘みがある。廃校が決まって、茶摘みも今年が最後である。それも無事に終わった。子供たちの心にこの茶摘みはどのように記憶されるのだろうか。作者は土浦の人。

引継ぎの書類こまごま木瓜の花　石川裕子

三月、四月は異動の季節である。ということは、また業務の引継ぎの時である。後任者に引継ぎ、前任者から引継ぎを受ける。こまごました書類の数々。気骨の折れる作業である。おりから木瓜の花の賑わう時。緋色の花は賑やかに、白い花は清らかに、紅白まじりの花は和やかに、それぞれ心にしみてくる。作者は静岡の人。

轆轤挽く手のしなやかや柿若葉　光岡れい子

陶器を作るために粘土を成型している場面である。陶芸家にとって手は何よりも大切なものである。多少ごつごつしていても、絶えず手入れされ、なめらかであるが、強靭な力を秘めている。しなやかに働く。工房の窓からの柿若葉の反射光が明るい。作者は益子の人。

生きるもの皆やはらかき五月かな　中鉢弘一

作者は五月という季節について、あれこれと思いを巡らしたのであろう。青い空。あふれる青葉、若葉。薫る風。そして、その中で躍動する人間も含めた生きものたち。生きものたちの、のびのびとして、しなやかな姿に思いが至った時、作者はそれを「やはらか」と表現したのである。理屈や説明の句ではない。作者は札幌の人。

母の日やマザーテレサの深き皺　太田佳美

マザー・テレサはユーゴスラヴィア出身のカトリック修道女。インドのカルカッタで貧民、老人、孤児、病人の救済に献身し、「神の愛の宣教者会」を設立。ノーベル平和賞を受賞した。作者は母の日に関連する報道でマザー・テレサの写真を見たか、あるいは母の日ということから母なるものの象徴として敬愛する彼女を思い起こしたか。マザー・テレサの表情に刻まれた深い皺に、彼女の慈愛と苦悩を改めて確認したのである。作者は江別の人。

逃水を追うて走者の走りたる　望月敏男

逃水は草原などで遠くに水があるように見え、近付くと逃げてさらに遠くに見える、という現象。強い日差しの下、舗

装道路の上などでも見られる。ここは後者であろう。作者の目には、駅伝やマラソンの走者が走る前方に水溜まりがあるように見える。走者の目にも見えているだろう、と作者は考える。作者は静岡の人。

咲ききつて香の解けたる牡丹かな　大久保　進

珠のような牡丹の蕾は、固くみっしりとしていて頼もしい。いかにも充実している感じである。その蕾がほどけて、花が開ききった時に、花びらとともに閉じ込められていた香も解き放たれた、というのである。作者は川崎の人。

黙々と土と語りて耕せり　謝花寛営

種を蒔き、苗を植える前に、土をすき返し、土の状態を整えるのが「耕し」である。今日では機械で耕すことが多いが、この句は、人の手による耕しである。黙々と土を鋤き返しているが、土の状態を観察しながら耕している。それを「土と語り」と見たのである。耕人の篤実さが表現されている。作者は那覇の人。

麦の穂に白き風あり暮れなづむ　上岡佳子

麦畑に風が吹き寄せ、青麦の穂がいっせいに白く光る。日は暮れそうでなかなか暮れないでいる。麦秋を迎える前の、充実したひと時の情景。「白き風」という把握がよい。白は秋に関わる色であるが、気にならない。作者は栃木の人。

川砂の湿りを舐むる蝶の群　吉野美智子

白い蝶か、黄色い蝶か、あるいは黒揚羽か。河川敷に蝶が群れて水を吸っているという句は、句会で出会ったことがある。心ひかれる、神秘的な感じさえある情景である。この句は、「川砂の湿りを舐むる」と丁寧に、具体的に表現しているのがいい。作者は静岡の人。

以下、三句組より

花冷をいふて来る客帰る客　宮西修一

日本人は季節や気候の変化に敏感で、日常の挨拶もその話題から始まる。桜の花の季節、誰もが花冷えを口にするのである。作者は徳島の人。

雀蜂の巣の青海波叩かるる　田上幸子

雀蜂の巣は見るからに精妙に作られている。表面の波型の模様も美しい。それを青海波と見立てたのである。蜂の巣を叩き落とそうとしているのである。作者は小松島の人。

雨あとの地のひろびろと麦青む　宮田千恵子

雨が上がった後、確かに大地は広々として見える。視野が明るくなって、心が晴れてなど、いろいろと説明もつくが、ここは実感である。改めて、麦の芽が伸びていることに気付いたりする。作者は福岡の人。

選者のはなし㉒

五月二十七日の同人句会は、参加者が三十三名。冒頭、十九日に亡くなられた大坪景章名誉主宰を追悼して、全員で黙禱を捧げました。やや蒸し暑い日でした。

夜の新樹場末ホテルの急階段　小林愛子

「夜の新樹」がとてもいい。都会的ないい句だ。一句の中に「夜の新樹」のプラス感と、「場末ホテル」のマイナス感が混在するのが句を良くしている。

葦切や霞ヶ浦の波元気　古川京子

霞ヶ浦は岸辺に立つと海のようで、恐ろしい感じがする。特に風の日など、白波が音を立てる。これを「波元気」と捉えた。これがおもしろい。この比喩がとても効いている。

白藤の空ひろごりて母の葬　榎本文代

自分の母のことではあるが、亡くなったお母さんへのお悔やみの句。「白藤」がとてもいい。季語の選択が成功。この季語が生きて、句を成り立たせている。

戻つて来よ満中陰の豆御飯　三澤治子

「満中陰」は四十九日のこと。作者を知れば、満中陰は妹いつ子さんのそれ。「豆御飯」がとてもいい。妹を想う気持を、さりげない日常の季語を使って詠んでいるのがいい。

千仞の谷へ大滝ふくらめり　江見悦子

同時に詠まれた「ヨセミテの渓」の句と併せ読むと、谷の深さが良くわかる。「ふくらめり」から、その滝の大きさがわかる。那智の滝は百三十米あるが、ふくらまない。

（以上内海良太主宰選）

茶の帽子五月の風に見失ふ　水野加代

「茶の帽子」と言えば、景章先生の中折れ帽。この一言で先生の様子が浮かび上がる。「五月の風に見失ふ」は、うまい。さりげない表現だが、とてもいい。悲しさが漂う。

遊ぶ子の一抜け二抜け月見草　谷田部栄

とてもいい句、そしてうまい句。ともかく「月見草」がいい。郷愁を誘う。「月見草」でいただいた。季語が生きている。

弔辞書き終へ短夜の仕舞風呂　内海良太

景章先生への弔辞を書き終えた。そのほっとした気持ちと寂しさと、「仕舞風呂」の侘しさが合っている。「短夜の仕舞風呂」がとてもいい。

（以上小林愛子副主宰選）

時鳥忍び音もらす椿垣　奥太雅

「椿垣」と言えば景章先生。作者は、「椿垣」に時鳥が来て鳴いているのを「忍び音」と感じた。その声を聴きながら、先生を偲んでいる作者の気持ちが良く現れている。

石楠花や笑ひ声洩る巫女溜　内海保子

「石楠花」と「巫女溜」の取合せがいい。「巫女溜」で楽しげに談笑する巫女達の、意外な場面を捉えたのがいい。

万緑や四校の帽子冠り去る　吉中愛子

「四校の帽子」は景章先生。四校の帽子を冠って「万緑」の中を逝かれた。先生を偲ぶ作者の気持が良く現れている。

（以上山田春生顧問選）

（三屋英俊）

第十四回「万象」千葉県支部俳句大会

五月十二日（土）、第十四回千葉県支部俳句大会が、成田山書道美術館で開催されました。当日は良い天気に恵まれ、周辺の新緑も鮮やかで、とても気持の良い大会となりました。

吟行地は成田山新勝寺、成田山公園とその周辺。新勝寺は今年開基千八十年、十年ごとの記念大開帳の年に当るため、多くの善男善女が参拝に訪れていました。又外国人観光客も数多く見られました。

新しく建立された「醫王殿」には、薬師如来、日光菩薩・月光菩薩が安置され、落慶法要も営まれました。又大会会場の書道美術館では、特別展が開催され、狩野派の絵など、新勝寺所蔵の至宝を見ることができました。大会は、千葉県支部のメンバーに加え、柳澤宗正同人会会長（神奈川県支部長）はじめ、東京支部からも多数ご参加をいただき、正午からの俳句大会は、内海良太主宰以下総勢四十七名で実施されました。

以下、各選者の特選句

内海　良太主宰特選

御朱印所墨の香つんと薄暑なる　久保村淑子

内藤　恵子顧問特選

暗がりに大日如来竹の秋　横川良子

山本とく江先生特選

新緑やお手綱に触る大塔婆　宮本加津代

沢辺たけし支部長特選

夏の空映す田水の漲れり　草間三香子

以下、高得点句

奥の院出て薫風のこの世かな　吉田寿美子

籠を積むよろづやの軒竹婦人　片桐帆一

新緑の色をたがへて溶け合はず　沢辺たけし

将門を鎮めし寺のご開帳　内海良太

木目ばかり残る額堂風薫る　久保村淑子

講宿の屋根に一尺青芒　松浦陵保

万緑や炯眼くわつと青不動　三屋英俊

滴りて吾も水琴窟の中　鹿毛満子

御手綱の光る天辺夏つばめ　柳澤宗正

指先が太さ確かめうなぎ裂く　赤堀洋子

新緑の底よりひびく水の音　渡部洋子

薫風をまとひてくぐる仁王門　赤堀洋子

来年の再会を約束して午後三時半、予定通り閉会しました。

（三屋英俊）

新緑の台湾の旅

四月十六日から四泊五日、「なると」主宰福島せいぎ氏（「万象」顧問）ら有志十五名で、新緑の美しい台湾へ旅に出た。台湾は福島主宰にとって、第二の古里であり、台北俳句会とのご縁も深い。それは「台北俳句会」を創設した、黄霊芝先生との出会いから始まった。今回、台北俳句会のリーダーである李錦上氏（なると同人）にお会いする目的もあった。

まず、関西空港から台北空港へ。到着後、台湾新幹線にて台中へ移動。午後、李錦上氏と杜青春氏の待つ宝覚寺にてお会いする。寺院の庭の高さ三十三米もある巨大な金色の布袋様がお出迎え。その夜は李錦上氏、杜青春氏と私たち一行は、客家料理を囲み懇親を深めた。

翌日、福島主宰肝煎の台中日本人学校を見学。その後バスにて台南へ移動。赤崁楼、延平群王祠、烏山頭ダムの八田与一記念館を見学し、バスにて高雄へ移動。蓮池譚、寿山公園を見学。その日の夕刻、六合夜市を散策。狭い路地の屋台には色々珍しい食べ物や雑貨が並び、観光客で賑わっていた。

三日目、高雄から新幹線にて台北へ。車窓から田園風景を楽しむこと約二時間、着後、バスにて九份老街を散策。再び台北市内に戻り龍山寺と台北一〇一タワー等を見学。その夜は一流レストランにて北京料理と紹興酒に酔う。

四日目、忠烈祠の衛兵の一糸乱れぬ交代式を見学。故宮博物館の至宝に感動し、日本統治時代の庁舎・総統府の中へ、身体検査も厳重であった。最終日は、中正記念堂を見学した。台湾の経済発展は目覚ましく、街に活気が漲っていた。

（村上和義）

台湾での俳句

夏燕布袋の臍を出入りせり　福島せいぎ

囀りのひときは高し総督府　福島吉美

台北のひとり旅寝の竹夫人　村上和義

台湾の夜市の吐息春灯　林　早苗

九份の墓はカラフル山法師　山本瑤子

狛犬の口に蜂棲む赤崁楼　田上幸子

紹興酒のみてへろへろ春の旅　宮西修一

衛兵の強き目力風光る　平岡　功

官邸の回廊抜ける春の風　岡田あゆみ

童顔の残る衛兵汗ひかる　田中美枝子

オカリナの絵付け自在や春セーター　池北秀子

同人会便り

第一回幹事会開催

五月二十一日、上野の東京文化会館で同人会第一回幹事会が開催され、幹事十四名中関東圏中心に八名の出席を得て、活動方針が話し合われた。その後「万象会議」の了承も得られたので、以下に概要を報告します。

一、**来年の同人会総会**　日時：平成三十一年四月十六日(火)　場所：航空会館(東京都港区新橋)　午前吟行（東京駅～日比谷公園）、午後総会、句会、懇親会。詳細は追ってお知らせします。なお、再来年以降の同人会総会は全国大会へ合流する方向で検討。

二、**中山純子記念俳句賞について**　同人会が主管　①応募資格は同人に限定②作品十五句③応募の締切二月十五日④発表三月末⑤投句先石川県支部⑥その他事務、同人会事務局。詳細は追ってお知らせします。

三、**同人名簿**は検討の末、利便性を優先し現行維持とする。

四、**会員増強について**　①基本的に同人一人が一年間で会員一人を増やすという意識で勧誘の声掛けを続けること②俳人協会等外部の作品募集に積極的に応募、また俳人協会の支部活動への積極的参加により「万象」の知名度を上げる③各地域での俳句講座の開催④「万象」句会場に勧誘ポスターの常時貼り出しなど。地味だが続けることが大切。

五、その他、故大坪景章名誉主宰へ生花と香典を同人会としてお供えした。

（文責・柳澤宗正）

珈琲タイム ⑲

【問1】『脚注名句シリーズⅡ-13細見綾子集』（俳人協会）から拾った名句です。空所を埋めましょう。

1. 谷へちる花のひとひらづつ□
　ア 翳り　イ 雫　ウ 光り　エ 夕日
2. □重き仏を見たり深き春
　ア 厨子　イ 箔　ウ 瓶子　エ まぶた
3. □鳴けり少年の朝少女の朝
　ア 雉子　イ 鹿　ウ 蟬　エ 蟇
4. 母鹿に□なめられて子鹿かな
　ア 尻　イ 角　ウ 爪　エ 鼻
5. □の深むらさきも雁の頃
　ア 古九谷　イ 古備前　ウ 普段着　エ 友禅
6. 再びは生れ来ぬ世□冬銀河
　ア か　イ の　ウ や　エ を

【問2】秋の植物の季語です。読み方を答えましょう。

1. 柑紅葉　2. 新松子　3. 無患子
4. 敗荷　5. 零余子　6. 千屈菜

【問3】清記は正確に！　一字直して校正しましょう。

1 六月や六日も常の夜には似ず　松尾芭蕉
2 仲秋や月明かに人老ひし　高浜虚子
3 黒揚羽九月の樹間透きとをり　飯田龍太
4 銀漢を仰ぎ疲れること知らず　星野立子

（解答は本号の「東西南北」のページにあります。）

「万象」中央句会五月例会

平成30年5月5日
東京文化会館31名

内海良太主宰選

大椎の蔭より烏揚羽かな　江見悦子
雨を来て謙信平ただ緑　増田幸子
着任の丸刈り教師夏来る　谷田部　栄
たも網の網目のしづく夏来る　中村千久
夕映えの沖へ帽振る沖縄忌　小池宗彦
夏立つや肉に塩ふる裏表　吉中愛子
掃部山の裾に高きは桐の花　島野ひさ
どの角を行くも漂ふ花蜜柑　桔梗　純
惜春や渓を隔つる遥拝所　内田郁代
声明や散華にまごう揚羽蝶　田中道江
道灌の遠駆けの里澱山吹　南雲秀子
大降りの山路明るき桷の花　亀田やす子
源流は那須の雪嶺花うぐひ　矢田部　栄
落慶の相輪かすむる初つばめ　田中道江
夏立つや伝法院の池めぐる　亀田やす子

飛高隆夫選

ハンカチの木の花白を振りかざす　亀田やす子
蝙蝠の空に夕づつ光り初む　赤堀洋子
朽ちてなほ沖恋ふ舟や青葉潮　下嶽孝一
影となり光となりて囀れり　内海良太
むくの二羽雀隠れを後先に　江見悦子
牡丹に百万遍の数珠の音　原田しずえ
浅草の地下街の混む昭和の日　小池宗彦
鰡の子の渦巻く浅瀬日を返す　柳澤宗正
金閣のひともと柞林かな　江見悦子
弁財天のくらき窟より初蚊かな　増田幸子

江見悦子選

たも網の網目のしづく夏来る　中村千久
影となり光となりて囀れり　内海良太
芝ざくら丘がこんなに丸いとは　内海良太
空揺らす白雲木や風薫る　岡村純子
牡丹に百万遍の数珠の音　原田しずえ
透け透けの昇降機行く朧月　長谷川信也
道灌の遠駆けの里澱山吹　南雲秀子
啓蟄や稚児にもらふ生欠伸　長谷川信也
野毛山にきりんの幟若葉風　桔梗　純
地球儀の海の青さや子供の日　谷田部　栄

「万象」同人句会五月例会

平成30年5月27日
俳句文学館33名

内海良太主宰選（○は特選）

○夜の新樹場末ホテルの急階段　小林愛子
葦切や霞ケ浦の波元気　古川京子
ヨセミテの渓をましろに花水木　江見悦子
常住を遺して逝けり不如帰　山本とく江
白藤の空ひろごりて母の葬　榎本文代

麻袋に育つじやがいも路地住ひ　須賀允子
染物屋ののれん色褪せ青葉風　須賀允子
訃報ついに駅舎抜け行く夏燕　久保村淑子
ジグザグの線をあらはに雪解富士　奥　太雅
戻つて来よ満中陰の豆御飯　三澤治子
葛新し万緑のかづら橋　原田しずえ
千仞の谷へ大滝ふくらめり　江見悦子
浮き出でし川鵜の眼みどりなる　沢辺たけし

小林愛子選（○は特選）

○茶の帽子五月の風に見失ふ　水野加代
総門につづく山門若楓　水野加代
ぼうたんの咲きくたびれし寛永寺　内海良太
吹奏楽青田の中の校舎より　谷田部栄
白藤の空ひろごりて母の葬　榎本文代
遊ぶ子の一抜け二抜け月見草　谷田部栄
弔辞書き終へ短夜の仕舞風呂　内海良太
竹落葉流るる川に染物屋　名和政代
古畳太鼓かかへし蜘蛛はしる　榎本文代
植田風も薬味のひとつ手打蕎　古川京子

山田春生選（○は特選）

○時鳥忍び音もらす椿垣　奥　太雅
アカシアの花や照り合ふ拉致の海　榎本文代
蜻蛉生る少年兵の逝きし地に　島野ひさ
遊ぶ子の一抜け二抜け月見草　谷田部栄
石楠花や笑ひ声洩る巫女溜　内海保子
戻つて来よ満中陰の豆御飯　三澤治子
千仞の谷へ大滝ふくらめり　江見悦子
薫風に鼻梁を高く逝かれけり　小林愛子
万緑や四高の帽子冠り去る　吉中愛子
ジャスミンの香に噎せゐたり葬のあと　小林愛子

▽中央句会　8月4日(土)　東京文化会館　午後1時より
▽同人句会　8月26日(日)　俳句文学館　午後1時より

谷田部榮第二句集（序・内海良太）

鮎のこころ

角川書店刊
四六判・上製本
定価二七〇〇円

谷田部さんの俳句は感動を核にした即物具象の写生で、しっかりとした物を捉える認識眼と、優しい眼差しを通しての作品は多くの人の心を打つ。（良太）

申込先
〒179・0084
東京都練馬区氷川台3－24－20
谷田部　榮

「万象」の方は、謹呈致します。

消息等

故大坪景章名誉主宰の句、「たかんな」5月号で鑑賞　「現代俳句の四季」の頁で、江渡文子氏が鑑賞。『俳句界』三月号の特集「賑やかな高齢者俳句より」に発表した〈冬立てば背筋伸ばして古ソフト〉の句についてである。

「自選五句～90歳以後」の中の一句。まず「ソフト」は、ソフト帽のことで間違いないだろう。フェルト等でできた、鍔のある、頂の中央が縦に折れくぼんだ紳士帽……。昨今は全くと言っていいほど見かけないが……。「古ソフト」と「背筋伸ばして」に、作者の世に阿らない達観の人生、日常が感じられる。

第二十二回曾良忌俳句会（敦賀市文化協会主催）で三名の方が入賞　5月22日、西福寺を会場として開催された。

敦賀俳句作家協会賞

曾良の忌や句碑に色添ふ花菖蒲　川口和代

選者特選

壱岐に果てし曾良を偲びて夏の蝶　山本みゆき

雨蛙山に谺す曾良忌かな　倉谷紫龍

中條今日子同人（松本）　6月3日のNHK日曜美術館に出演。自家に蔵する柚木沙弥郎（染色家・デザイナー）の作品について感想を述べた。

「柚木沙弥郎の染色―もようと色彩」展は4月3日から6月24日まで、東京駒場の日本民芸館で開催された。

句会だより

新潟県支部吟行句会　5月20日（日）快晴の一日、加茂市加茂公園に吟行。折からの宵祭りに賑わう青梅神社周辺を歩き、神社前の料亭「きふね」で句会を楽しんだ。佐藤雄二以下11名参加。

緑蔭や家紋薄れしみくじ箱　斉藤　信

一雨に若葉明りの大社　榊原キヨ子

新樹かげ磴のへこみの水溜り　髙野松風

竜安寺の庭模す宿に夏句会　渡辺志ま

青空の白雲迅き夏木立　佐藤幸示

佐野吟行句会　5月24日、唐沢山県立自然公園（佐野市）を吟行。雨上りの青葉が眩しい中、関東一の山城と言われている城跡の天狗岩、大炊の井、本丸跡の唐澤山神社などを巡り、南城跡の館で句会。亀田やす子以下13名参加。

山法師エミューの番首伸ばす　飯塚満里子

裏返る葉の白々と五月山　飯塚キミ

さびたの花肩に降りつぐ虎口かな　売野　緑

時鳥鳴きつつ渡る深き杜　島田和枝

老鶯やときをり波紋森の池　仲山さよ子

杜鵑水琴窟に音無かり　茂木弘子

（報・江見悦子）

『珈琲タイム⑲』の解答

【問1】1　エ　2　エ　3　ア　4　ウ　5　ア　6　ア

【問2】1　ははそ　2　しんちぢり　3　むくろじ　4　やれはす　5　むかご　6　みぞはぎ

【問3】1　六月→文月　2　老ひし→老いし　3　とをり→とほり　4　疲れる→疲るる

（この線より切り取ってください）

万象作品

三十年
十二月号
（九月十五日締切）

（句の表記は歴史的かなづかいで）

都または市・町・村名	
ふりがな	
姓　号	
年齢	

送り先　〒166-0003
東京都杉並区高円寺南3-52-8　藤田裕子

新規会員を紹介します	
姓　　号	
郵便番号　〒	
住　　所	

投句者住所　〒

投句者姓号　　電話

全国俳句大会　投句用紙

※作品集への連続掲載を避けたい方は、用紙をコピーして一組ずつお書きください。

（切取線）

投句締切
8月20日

・投句料　　円（　　組）同封しました。

・大会に（**出席・欠席**）します。いずれかに○印を。

住所
〒

（電話　　）

姓号

2句1組 1,000円

2句1組 1,000円

宛先　〒179－0081
東京都練馬区北町2－17－16　島野ひさ

※作品集への連続掲載を避けたい方は、用紙をコピーして一組ずつお書きください。

あとがき

▽大坪名誉主宰の遺影が掲げられた七月号、創刊以来初めて、先生の俳句作品を拝読することが出来ませんでした。亡くなる一か月前まで作品を発表し続けた先生の教えを大切に、内海良太主宰の下、良い俳句を作っていきたいものと思いを新たにしています。

今月号では新人賞を授賞されたお二人を紹介しました。「万象」に又、新しい息吹が吹き込まれました。（江見）

▽梅雨の季節の紫陽花、雨に深まってゆく花の色は鬱陶しい気持ちを和らげてくれます。いつも通る道に今年は、凌霄花、木槿の花、白粉花も咲いています。まだ六月半ばなのに。（文代）

▽六月十八日朝の大阪北部の地震では、通学途上の児童が被災したほか、大きな都市災害が発生しました。沢木欣一全句集の地震を検索したところ〈梅雨に入る横揺れのながき地震〉など六句が表示されました。何れの句も地震に直面した緊迫感のあるものです。（茂）

▽政治家や官僚、それを取り巻く連中の劣化が止まらないことに苛々は募るばかり。社会性俳句の旗手と言われた沢木欣一ならば、この世相をどのように詠んだことだろう。（千久）

▽「万象ノオト」のページに帽子にまつわるエピソードが寄せられました。帽子と言えば私は「人間の証明」の麦藁帽子の印象が強烈です。（規子）

▽八月…山。子供の頃、夏休と言えば祖父母の家に。父方の祖父母の家からは白山が、母方の祖父母の家からは黒姫が見えた。「山を想えば人恋し、人を想えば山恋し…百瀬慎太郎」。（英俊）

▽吟行会色々参加しました。無理かと思われる所も、行動してみると楽しいことが沢山あり、出会いも広がりました。（純）

▽今日はワールドカップ、日本の初戦、試合も見たい。でも、小心者の私はじっくり見ている事ができない。角川出版の『鑑賞、日本の名句』の中から好きな句を拾い読みして、時折戦況を確認。どちらも身に入らないことこの上ない。おまけに、この文章を聞き耳を立てながら入力している。（内田）

会員を募ります

会員は左記の会費（誌代）を前納していただきます。

半年分　六、〇〇〇円
一年分　一二、〇〇〇円

会費の納入は左記の振替をご利用ください。新会員は必ずその旨明記。

郵便振替口座　〇〇二三〇・〇・一〇三五八一
万象俳句会

住所変更等　住所変更、退会等については左記にご連絡願います。

〒二八五・〇九二二
千葉県印旛郡酒々井町中央台1-17-12
竹澤誠治

万象　八月号

第十七巻第五号
通巻第一九七号

平成三十年八月一日　発行

主宰　内海良太
発行人　小林愛子
編集人　江見悦子

〒二四一-〇八一六
横浜市旭区笹野台三-二六-二
万象発行所
☎〇四五-三六一-七五九一

印刷・有文社（☎ 042-475-0436）

平成三十年度「万象」全国俳句大会案内

開催日　平成三十年十月二十九日(月)

会場　ホテル　ラングウッド（東京都荒川区東日暮里五－五〇－五）☎03・3803・1234
交通＝JR山手線・京浜東北線・京成「日暮里駅」南口より徒歩一分

当日の予定

大会　午後一時（受付正午より）～三時四十分
主宰挨拶、万象俳句賞・「万象」新人賞授賞、新同人発表、大会作品発表など

座談会　井村和子氏、中條睦子氏

懇親会　午後四時～六時

会費　一万二千円（大会・懇親会を含む）

申込み　八月二十日(月)までに会費を左記へお振込み願います。会費納入をもって参加申込みとします。
郵便振替口座　00190－1－791267　山本　功(右近)　☎048・864・8098

大会作品募集

作品　二句一組（二組以上歓迎）「万象」誌（七・八月号）巻末の綴じ込み用紙をご使用下さい。
住所・姓号・電話番号・大会出席の有無をお書きください。

投句料　一組千円（句稿に同封）▽**締切**　八月二十日（月）

投句先　〒179－0081　練馬区北町2－17－16　島野ひさ　☎03・3934・6565

有志吟行句会　十月三十日(火)子規庵、朝倉彫塑館、にっぽり繊維街、諏方神社等周辺を予定。希望者のみ。（詳細別途）

平成三十年度「万象」全国俳句大会実行委員会
大会委員長　内海良太
実行委員長　中村千久

万象　第十七巻　第五号（通巻一九七号）　平成十四年十一月十三日　第三種郵便物認可
平成三十年八月一日発行（毎月一回一日発行）